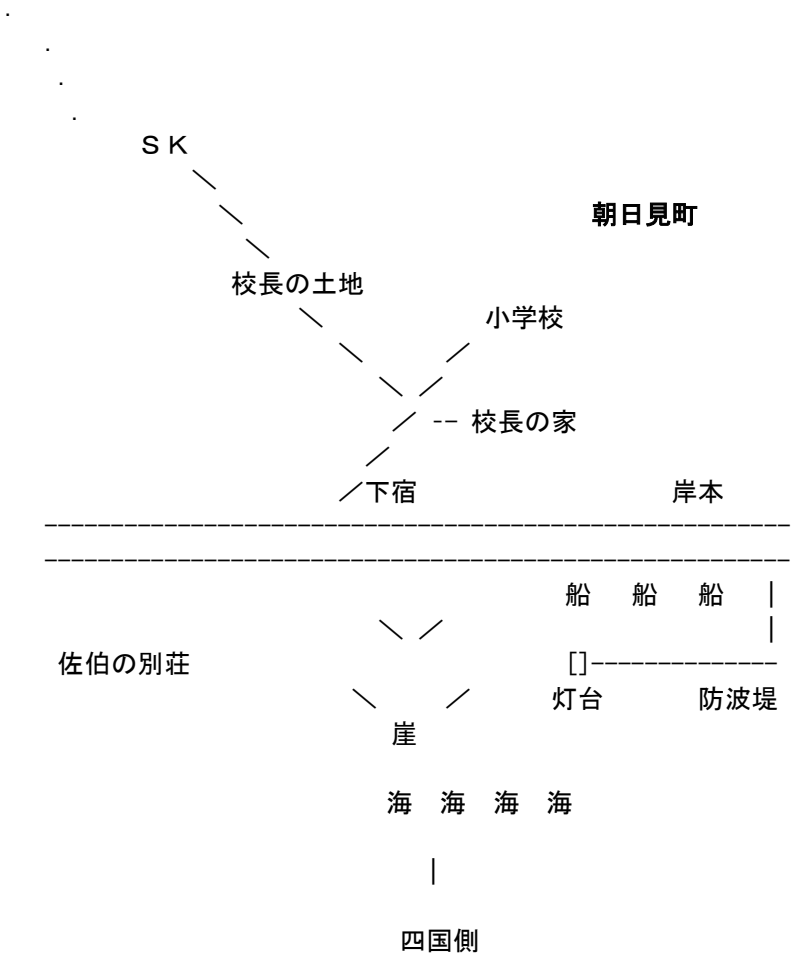
「顔のない生徒」= "A faceless student"

By Rika and Junko Copyright 2006

Interactively written movie script by friends in the US and Japan

西見市はこちら



エピソード１　　目撃

---７月２０日　日曜日--- 白いブラウスを着た３０近い女性が歩いている。髪は長いが、後でまとめていた。 真夏だ。やけに蝉の声がうるさかった。汗を拭きながら、石垣に沿って坂を下りて行 った。

ここは朝日見町。宮崎の南端にある小さな漁村だ。 彼女は、ここのちっぽけな小学

校の教師として派遣されてきたのだ。
彼女の名前は高田美菜子。ここに来てまだ３日目だった。

坂を下りきって、左に曲がったところが彼女の下宿先。小さい饅頭屋の上だった。かき氷の旗が風に揺れていた。 彼女が帰って来ると、割烹着姿の６０代の女が迎えに出た。

おばさん：「どう？学校のほうは？」
美菜子：　「ええ、とってもいい校長先生だし。生徒たちも明るいし。」

そう言うと美菜子は２階へ上がっていった。おばさんは「無口な子だねえ。」と小さく呟いた。美菜子の部屋には、まだ開けられていない箱が５つ６つ並んでいた。これから片付けるところだった。

その夜、片付けもほとんど終わり、涼みに表に出た。きれいな星空の下には、暗い海が繋がって見えた。彼女はふと、その暗い海に飛び出す岬に目を向けた。それは５０メートルくらい離れたところで、近くの灯台の明りが先端を時々照らした。 美菜子はその岬の崖の上から、人が落ちるのを見てしまった。

もう一人が、さっと走り去るのが見えた。 美菜子は慌てて家に入り、おばさんに電話を借りて警察に通報した。

美菜子：「人が・・人が・・崖から落ちましたー。」 小さい村なので交番しかないが、

隣町の西見市には、一他警察署があった。交番の巡
査は明日の朝、刑事が来て調べると言い、現場にテープを張った。
ブツブツと「こんなことは初めてだ・・・」と愚痴をこぼしながら。

早朝に刑事が二人やって来た。イケスカン、うちわを持った中年の男(徳島 / 徳さん)と若い、人のよさそうな新米刑事 (森田俊) だった。

エピソード２　　急病

---７月２１日　月曜日--- 警察が崖の下へ調べに行くと、男性が死んでいた。彼の持ち物からフリージャーナリ ストということが分かった。大阪からやって来ていたようだが、何のためにこの町に 来たかのかは不明である。崖の上には争った痕跡が残っていた。

森田刑事が「殺しですかねえ。」と言うと、徳さんは「まだ決まった訳じゃない。」と一喝したが、心の中では殺しに違いないと思っていた。 目撃者である美菜子は、犯人らしき人の顔は遠くて分からない。フリージャーナリス トも見たことのない人物だった。

美菜子がこの朝日見町へやってきたのは、先任の教師が父親の病気のため、北海道に帰ることになり、急遽、派遣されたからだ。彼女は３年生と４年生のクラスを受け持つことになっていた。

彼女が見知らぬ土地で教師の仕事を受けた理由のひとつは、今まで住んでいた場所から離れたいという願望があったからだ。

----７月２２日　火曜日---- 次の日、美菜子は警察へ呼ばれ、ただ見たことをまた繰り返して話した。 徳さんはずっと天井を見たまま、うちわをパタパタさせて、「それだけですか？」と 何度も言った。森田は彼女が帰る時、深くお辞儀をしていた。
その後、美菜子は大急ぎで学校へ向かった。遅刻したが２時間目の体育の時間には、間に合いそうなので小走りになった。

準備体操をしている時に男子児童が倒れ、病院に運ばれた。 ひどい腹痛、
吐き気と高熱で様子をみるため入院することになった。 その子の母親が
独り言のように言った。
「なんか都会から新しい先生が来た途端、事件や病気や・・・ほんとに・・・」

エピソード３　　聖子と佳代 美菜子は自分の責任ではないと分かっているのに、

家に帰りづらくなって廊下のいす
に腰掛けた。昨夜の事件のせいであまり寝ていないため、すぐにウトウトしてしまった。

-----夢の中の回想-----
---（実際に１年前に東京であったこと）---

校庭の庭で美菜子と何人かの生徒が花壇を手入れしている。新しく向日葵を植えたのだった。
「先生、私、夏休みも来て世話していい？」と聖子が言った。
「いいわよ。私も毎日来るつもりだから。」

シーンは変わり、テレビのニュースが映る。
「２日前から行方不明になっていた、山田聖子ちゃん、１０歳の遺体が今日見つかりました。何者かによって首を絞められて殺された形跡があり、遺体はダンボール箱に入れられ、小学校の近くの空き地に置いてあったのを、通りかかった・・・・・・」
美菜子は持っていた湯呑をガチャーンと床に落とす。

シーンは変わり、喪服の女が美菜子に向かって走ってくる。
「あんたのせいだよ！あんたがあんな花壇のために聖子を呼び出すから。聖子を返しておくれ！返して！」と言いながら胸元を掴んで揺さぶる。

「止めて下さい・・・」と言いながら目が覚めた美菜子。看護師が彼女を揺さぶって起こしていた。
「お疲れのようですね。もう帰ってお休みになって下さい。裕太君の容態は安定していますから。」
美菜子はゆっくりと立ち上がって去って行った。

（----７月２３日　水曜日----）あくる日、
小学校の廊下で教頭とすれ違った。

神田：「高田先生。裕太君の具合はどうですか？」美菜子：「ええ、まだ腹痛と吐き気が、止まらないので入院しています。これまでも
こういうことがあったのですか？」神田：「いいえ、裕太君は運動もずば抜いてできる、とても元気な子ですよ。でもね
え、子どもの病気だけは分かりませんよねぇ。先生のクラスの岸本佳代。あの子も元気な子だったのに、もう１ヶ月も休んでいるでしょう・・」

美菜子はふと出席表に、ずらっとならんだＸＸＸＸＸを思い出した。 放

課後、教室で独りになった美菜子は岸本佳代の席を見つめていた。
何故か死んだ聖子の顔が浮かんだ。美菜子は急に立ち上がった。

そこは漁船がたくさん繋いである港のすぐ側だった。屋根が潰れかけたような家の表札が『岸本』となっている。家から５メートル程離れたところで、日に焼けた男が網を手入れしていた。茶色の猫がまるで獲物を獲ろうとするかのように、傍で身構えていた。

美菜子は男に声をかけた。
「あのう、私は新しく小学校に派遣された高田と言います。佳代ちゃんの担任になりました。」

「ああ。」男は振り向いたが、網を直す手は止まらない。

美菜子：「佳代ちゃん、ずっと休んでいるんですね。どうなさったんですか？」
岸本：　「病気だ。」
美菜子：「家で休んでいるんですか？」
岸本：　「いいや。福岡のでっかい病院に入っている。母ちゃんも一緒だ。」
美菜子：「あの一、病名は？」
岸本：　「なんか難しい名前でよく分からん。始めはひどい、はら痛と吐き気で食あたりだと思っていたんだか・・・そうじゃないらしい。」

美菜子の頭に裕太の病状が浮かんだ。 美菜子：「あの、何か変わったことがあ

ったら、ご連絡下さいますか？」
岸本：　「ああ。」と男は下を向いたまま言った。

美菜子が海沿いの道を帰って行くと、その横を黒い大きな外車がすれ違った。珍しいとは思ったが、別に気にせず、家に戻って行った。

エピソード４　　黒い外車 その車は小学校の側で止まった。車からダークスーツ

を着た男性が降りてきた。煙草
に火を点け、煙をゆっくり吸い込んだ。真夏だというのに、男の顔には汗ひとつ掻いていない。
男性の名前は、佐伯敬介４３歳。

美菜子は部屋で冷たい麦茶を飲みながら、明日の授業の準備をしようと思い、机に向かった。「あっ。ファイルを学校に忘れてきたわ。」と呟き、どうしても今日中に仕上げておきたかったので、取りに行くことにした。 夕方になり日差しはずいぶん和らいできたが、さっき一気に飲んだ麦茶のせいで、玉 のような汗が流れ出した。

美菜子が学校に着くと、さっきすれ違った車が止まっていた。「父兄の車かしら？」と思いながら、職員室に入って行き、机の中からブルーのファイルを取り出し、廊下に出た。 職員室の手前には校長室があり、美菜子が前を通ろうとした時、校長先生と男性の話 し声が聞こえた。

ちょうどその時、廊下の向こうで、用務員のおじさんが、「高田先生～。わしが作ったきゅうりとトマト、食べんねぇ。」と声をかけてきた。
「おいしそうですね。頂きます。」とおじさんに軽く会釈をして学校をあとにした。

トマトをひとつ取り出し、スカートで軽く拭いて頬張った。「校長先生のお客様は誰だったのかしら？」と考えながら歩いていたが、トマトがみずみずしく美味しかったので、そんなことは美菜子の頭の中からすっかり消えていった。

警察署内で森田が徳島にお茶を入れている。
「徳さん、例の殺されたジャーナリストですが、ずいぶん評判が悪かったみたいですね。」と森田が話しかけた。
「あぁ。金目当てで、あることないことを書きたてているらしいなぁ。殺したいと思っている奴はたくさんおるだろう。」相変わらずうちわをパタパタとさせながら答えた。

エピソード５　消えた車 その時、貧相な中年男

が部屋に駆け込んできた。
「徳さん、徳さん。」とハァハァ言いながら、徳さんのデスクの上に両手を置いた。

「あの、ジャーナリスト、内村はレンタカーを借りていました。ニュースを見たレン タカー屋の従業員が連絡してきたんです。」
「レンタカー？」森田は言った。
「そうかぁ。それでたいした持ち物がなかった訳だ。車の中に置いてあったんだろう。」徳さんが言った。

「内村は事件のあった朝に宮崎で車を借り出しています。赤いホンダのシビックです。従業員によると内村は空港に着いたばかりだったようです。」と刑事は慌てて言った。
「と言うことはどこにも泊まっていない訳だ。日帰りのつもりだったのか？・・・」徳さんは独り言のように言った。
「さっそく車を捜し出せ！」
「はい。もうレンタカー会社が捜し始めているんですが、今のところ目撃者はいません。」刑事はすまなそうに言った。
「とにかく捜し出すんだ。その中に絶対手がかりになるものがあるはずだ！」徳さんは怒鳴った。刑事は走って部屋を出た。

「犯人が車に乗って行った可能性が高いですね。」と森田は乗り出して言った。「一 体どこに隠しているんだ・・・もう証拠品はないかもしれませんよ。大阪の警察によ ると内村の部屋には何も手がかりになりそうな物はなかったようですし・・・」 徳さんのうちわはいつもより激しく動いていた。「一体何をしにここに来たんだ・・・」

その頃、美菜子は自分の部屋で仰向けになって天井を見つめていた。 裕太の病状は変わっていないと病院から聞いたばかりだった。 裕太の顔、聖子の顔、そして佳代の父親の顔がグルグルと回り続けた。

「みーなーこさん。ご飯ができたわよー。」と大きな声がした。美菜子はそのとぼけた声に救われた気がした。

エピソード６　　悪夢

---７月２４日早朝--- 小山校長は明け方から降りだした強い雹の音で目が覚めた。悪い夢を見たせいかパジ ャマは汗でぼとぼとだった。台所へ行き、水を一口飲み、30 年前の雹の日を思い出し ていた。

当時、小山は教師という仕事にやりがいを感じていたし、もうすぐ結婚を控えて、充実した日々を送っていた。

その日は、朝から雹が降っていた。休日だったこともあり、少し早い時間だったが、するめを炙って酒を飲むことにした。ちょうどその時ドアを叩く音がし、玄関に出てみると学生時代の友人が立っていた。

「田口じゃないか。久しぶりだな。大学の卒業式以来じゃないか。」何年か振り見た友人は昔より痩せていて疲れているように見えた。

「近くに来たから寄ってみたんだ。」
「そうか。一杯やろうと思っていたところだ。一緒に飲まないか。」
田口は部屋に上がり「ずいぶん綺麗に片付いているな。直子さんが掃除をしているんだな。」周囲を見回しながら言った。小山と田口と小山の婚約者である直子は大学の同級生だった。

小山は、不器用で真面目だけがとりえだった。反対に田口は今でいうイケメンでマメな上、要領がいいので彼の周りには、いつもたくさんの女性がいた。田口は密かに直子に想いを寄せていたが、直子は実直な小山に好意を持っていた。

大学時代の話で盛り上がり、時計の針はいつの間にか、夜中の一時をさしていた。二人の傍には一升瓶が転がっていた。一瞬の沈黙の後、田口の口からとび出した言葉に小山は耳を疑った。その瞬間、田口の胸倉を掴み殴りかかろうとしたが、酒のせいで足元をすくわれ、二人で倒れこんでしまった。その時、小山の下で鈍い不気味な音がした。

「田口、田口。大丈夫か。しっかりしろ。すぐに救急車を呼ぶからな。」 だが返事はなく瞳孔も開いてしまって何の反他もない。小山は自分自身に落ち着けと 繰り返し叫びながら、さっき田口が話したことを思い出していた。両親が亡くなり、 自分には身寄りがいなくなったこと、仕事を辞め、毎日ブラブラしていること、ここ には突然思い立ってやってきたこと。

１１９番しようと思っていた手をおろし、代わりにスコップを掴み、父の持っている 空き地へ向かった。土砂降りの中、一心不乱に土を掘った。
「これは、事故だったんだ。田口があんなことを言うから、こんなことになったんだ。 事故だったんだ。」

「なぁ、小山。卒業式の夜、彼女とデートの約束をしていただろう。その日、彼女は 風邪を理由に来なかっただろう。」小山はすぐには思い出させなかったが、直子から風邪引いて熱っぽいので行けそうにないと電話があった。見舞いに行くと言ったが、今から寝るのでと言って断られたのを思い出した。
「あの時、直子は俺と一晩一緒だったんだぜ。直子にとって俺が初めての・・・」その後の言葉は彼の口から二度と発せられることはなかった。

エピソード７　　寄せ書き

---７月２４日　木曜日--- 美菜子が校門を入ろうとした時、森田刑事が声をかけた。
「高田先生！！！！おはようございます。」大きな声に美菜子は驚いた。
「は、はい。おはようございます・・」

森田：　「いやぁ、お忙しい時にすみませんねぇ。でもちょっとだけお聞きしたいことがあって。いいですか？」
美菜子：「はい・・・。ちょっとなら。」

森田：　「この間の事件のことなんですがね。車を見ませんでしたか？」
美菜子：「車？」
森田：　「ええ、赤い車です。死んだレポーターが乗っていたはずですが・・・あぁ、夜だから赤いかどうか分かりませんよねぇ。ハハハ」
美菜子：「暗かったので、崖のところしか見えなかったんです。人しか見てません。」
森田：　「そうですかぁ。車が去って行く音とかは？」
美菜子：「人が落ちた途端、家の中に飛び込んだので・・・」
森田：　「そうですか。いえいえ、すみませんでした。明日からもう夏休みですね。東京に帰られるんですか？」
美菜子：「いいえ・・・。」
森田：　「ここもいろんな珍しいとこがありますから。じゃあ。」と言うと森田は去って行った。

教室では生徒たちが、大きな白い紙に寄せ書きをしていた。ひとつは裕太のために、もうひとつは佳代のためだった。一緒に夏休みを迎えられないのが、残念だという思いがこもっていた。

「先生！盆踊りには来るんでしょう？」ガキ大将っぽい男子生徒が言った。
「盆踊り？」
「うん。毎年この学校の校庭であるんだよ！一緒に踊ろう！」
「そうだ、そうだ。みんなで踊ろう。」とたくさんの生徒が言った。
美菜子は、にこりとして頷いた。
「佳代ちゃんが一番うまかったのにねぇ。」と女子生徒が言った。
「佳代ちゃん、盆踊りには戻って来れたらいいわね。」と美菜子が言うとみんなは寂しそうに頷いていた。

――――――――――――――

美菜子は寄せ書きを持って裕太のいる小さい病院へ入って行った。裕太の病室の前に行くと母親が出て来て、「あぁ。先生。」とお辞儀をした。
「裕太君、どうですか？」
「だいぶ良くなってます。会ってやって下さい。ちょっと。」と言うといなくなった。

美菜子が部屋に入ると裕太は疲れては見えたが、ベッドの上に座っていた。 美菜子：「裕太君、どう？だいぶ良くなった？」
裕太：　「うん。もうおなか痛とか吐き気はなくなったんだ。でもまだ弱っているから、もう少しだけ様子を見てたいんだって。」
美菜子：「良かった。はい、これ。みんなからよ。」と寄せ書きを手渡した。
裕太：　「わあ。すげぇ。ありがとう。」
美菜子：「ありがとうは元気になってみんなに言ってあげて。盆踊りに来て。」
裕太：　「うん。」

裕太は本当にうれしそうだった。 美菜子：「ねぇ。何か悪いものでも食べた

の？」
裕太：　「分からない。僕以外、誰もお腹こわしてないし。」
美菜子：「そう・・・でも元気になってよかった。」

美菜子は宿題の説明とかをして、母親が部屋に戻って来ると「じゃぁ、裕太君が疲れたらいけないので、失礼します。」と言って帰った。

美菜子の手には、もう一枚の寄せ書きがあった。佳代の父親に渡すつもりだったが、盆踊りのことを思い出して、佳代ちゃんに直接伝えたいと思った。それに、佳代の容態をもっと詳しく知っておきたいという気持ちもあった。美菜子は学校に戻ると教頭に聞いてみた。

美菜子：「あの・・・佳代ちゃんのお父さんが佳代ちゃんは福岡の病院だとおっしゃったんですが・・・どこかご存知ですか？この寄せ書きを持ってお見舞いに行きたいんです。」

神田：　「あぁ、それは良いアイデアですね。まだこの学校から誰も見舞いに行っていから。喜びますよ。えっと・・木村先生！木村先生！」と廊下を通りかかった保健の先生に呼びかけた。 神田：「岸本佳代は今どこの病院にいるか知っているかね？」 木村：「えぇ。確か福岡の大学病院でしたよ。」 神田：「そうだった。そうだった。いや、ねぇ、佳代ちゃんはその・・ね・・・貧乏と言ったら失礼だけど・・・とにかく・・・病院にも行かないでいたんで、校長が心配してね。そしたら、校長の知り合いのお金持ちが大学病院に友達がいるからって、そこを紹介してくれたんですよ。入院代とかも立て替えてくれてるみたいですよ。世の中には良いお金持ちもいるんですねぇ。すごいもんだ。」
教頭の感心した表情が面白かった美菜子は思わず、くすっと笑ってしまった。

廊下に出ると美菜子は保健の木村先生を呼び止めた。 美菜子：「あの・・・裕太君も佳代ちゃんも食あたりだったみたいですね。」 木村：　「えぇ。裕太君元気になったらしいですね。でも佳代ちゃんはまだ悪いみたいだから・・・違う種類の病気じゃないですか？じゃぁ。」

美菜子は明日にでも福岡に行くことにした。

エピソード８　　空き地

---７月２５日　金曜日--- 夏休みになり、子どもたちのいない学校はひっそりとして、蝉の鳴き声がいっそう大 きく感じられた。小山は校庭の隅の畑でいろんな野菜を育てていた。普段は子どもた ちと一緒に世話をしているが、夏休み中は、ほとんど小山の仕事であった。

麦藁帽子をかぶった小山が、鈴なりに実をつけているゴーヤに水を撒いていると「校長先生～、おはようございます。」と後ろで明るく澄んだ声がした。振り返ると数人の子どもたちがやってきていた。

小山:「おはよう。今日はゴーヤが大きくなっているから、そろそろ取ってもいいよ。」
「わぁーい。じゃ、僕一番でっかい、これ！今晩食べるんだ。」
「たけちゃん、ずるーい。私もそれがいい。」みんなが口々に騒ぎ出した。
小山：「これこれ、そんなに急がんでも、まだこんなにいっぱい実がなっているし、明日になったらもっと大きく、美味しくなっているよ。」

苦いはずのゴーヤだが自分たちで育てているから、子どもたちは美味しいと言ってくれる。小山は子どもたちと身近に接するのをとても大事に思っていた。

子どもたちが帰った後、校長室で先生たちの報告書に目を通していた小山は、どこかで電話が鳴っているのに気がついた。その音はズボンのポケットからだった。あわてて、携帯電話を取り出し電話に出た。
小山：「はい。小山です。」 佐伯：「佐伯ですが、今、よろしいでしょうか。」
小山が返事をするより早く佐伯が話を続けた。 佐伯：「先日、お伺いしてお話した件ですが、ご返事はいかがでしょうか。」小山：「それはあの時、すでにお断りしたはずですが・・・」
佐伯:「でも、こんな条件のいいお話はありませんよ。どこが気に入らないのですか。」と佐伯は声を荒げた。
小山：「いや。とにかく、手放すつもりはありません。佐伯さんにはいろいろお世話にはなっていますが、この件だけは、何度お願いされても答えは同じです。」
申し訳なさそうに小山は電話を切った。

しばらく考え込んでいた小山だが、程なくして学校を後にした。そして、家とは反対の方向の小高い丘へ向かった。丘の中腹あたりに広い荒れた土地があり、その土地の一角に古い、長さが３メートルぐらいの楕円形をした貯水槽があった。中の水は濁っていた。子どもが落ちると危ないので、柵で囲ってあり、大きな『立ち入り禁止』の札が、ぶら下がっていた。しかし、ところどころ大きな穴があった。

その日もサッカーをしていた子どもたちがボールを取りに柵の中に入っていた。
「誰だー。そんなところで遊んでいるのは！落ちたら危ないぞ。すぐに出なさい。」
校長先生に怒られた子どもたちはあわててとび出し、走って逃げて行った。
「柵の修理をしても、またすぐ穴を開けてしまう。困ったもんだ。教頭にまた修理をお願いしなくては・・・」と小山は呟いた。

エピソード９　　会えない

---７月２５日　金曜日--- 美菜子が福岡に着いたのは、もう４時過ぎだった。彼女は急いで病院に向かった。

やっと見つけた小児病棟には受付のようなカウンターがあった。そこで美菜子は岸本佳代の部屋を聞いた。しかし思いがけない返事が戻ってきたのだった。
「岸本佳代ちゃんはご両親の要望により面会は出来ない事になっております。」
「え？どういうことですか？私は佳代ちゃんのクラスの担任です。クラスのみんなから預かってきたものがあるのです。」
「少々お待ち下さい。」と言うと女は電話で誰かを呼び出した。

２～３分すると、青白い眼鏡をかけたインターンらしき男が出てきた。

インターン：「佳代ちゃんの担任の先生でいらっしゃいますか？」
美菜子：　　「はい。」と美菜子は慌てるように答えた。

インターンは受付の女と同じ事を言ったが、寄せ書きは預かって佳代ちゃんに渡すと言った。
美菜子：　「なぜ会えないのですか？とても容態が悪いのですか？」インターン：「詳しい事はご両親の承諾がないと言えません。でも心配しないで下さい。命に別状はありません。今日も元気に折り紙をして遊んでいました。」
美菜子：　「お母さんもこちらに来ていらっしゃると聞いたのですが？」インターン：「今日はお昼過ぎに帰られました。また夜来られると思いますが。待たれますか？」

美菜子はいつ現れるか分からない母親を待つより、後で戻って来る事にした。 寄せ書きを渡して、佳代ちゃんに今すぐ渡される事を確認すると、美菜子は病院を出 た。

病院の前の大通りを挟んで斜め向かいにホテルらしき看板が見えた。美菜子はそこで部屋があるか尋ねた。そこは小さなビジネスホテルだった。周りのビルに挟まれた、サンドイッチの具のようなビルだった。空いていた部屋は 3 階だった。美菜子がエレベーターで上がろうとした時、エレベーターの中から４０くらいの女が降りてきた。それが佳代の母親とは美菜子は知る余地も無かった。

病院ではインターンが看護士に寄せ書きを渡すように言いつけていた。看護士が部屋に入ると主治医の村瀬が脈を取っていた。「佳代ちゃん、担任の先生がこれを届けて下さったわよ。」佳代は寄せ書きを開いて嬉しそうに微笑んだ。
「担任の先生が来たのかね？」村瀬は聞いた。看護士が詳しい事はインターンに聞いてくれと言うと村瀬は部屋を出て行った。 廊下で例のインターンを見つけると誰が来たのか、いつ来たのか、何を言ったのか、 根掘り葉掘り聞いた。
「今度その人が来たら、私を呼びなさい。分かったね。佳代ちゃんのご両親は佳代ちゃんの今の状態を誰にも知られたくないのだから。」

美菜子は夕食を近所の屋台で軽く取った後、病院に戻った。今度は 5 分以上待って村瀬が出てきた。

村瀬：　「いやぁ。わざわざお見舞いに来て頂いて、佳代ちゃんも喜んでいました。あの・・お名前は？佳代ちゃんが知らなかったようなのですが？」
美菜子：「はい。高田と申します。今月から佳代ちゃんのクラスに赴任したものですから。」
村瀬：　「あぁ、じゃあ、顔も知らない訳ですね？」
美菜子：「あのう、お母さんは？」
村瀬：　「さっき電話がありました。今日は戻って来られないそうです。すみませんねぇ、わざわざ来て頂いたのに。何か言付けましょうか？」
美菜子：「いえ・・ただ私が来たとお伝え下さい・・・。先生、佳代ちゃんは元気になるのですか？」
村瀬：　「もちろん。大丈夫です。必ずみんなのクラスに戻りますよ。」

美菜子はその自信ある声を聞いてほっとした。

美菜子が病院を後にした頃、佳代ちゃんの部屋の中から「お母さん、それ取ってぇ」と言う声がしていた。

村瀬は自分の部屋に戻ると、電気も点けずに電話をかけた。
「あぁ、俺だ。今日、岸本佳代の担任の先生がここに来たぞ。高田とか言っていた。うーん、うん、いや何も別に聞いていなかった。だが会えないことは不思議がっていたぞ。うーん・・・また連絡する。」

---７月２６日　土曜日--- 美菜子の乗った電車が西見駅に着いたのはあくる日の昼過ぎだった。バス停で待って いると、向こうからお年寄りの手を引いた森田が横断歩道を渡って来た。 お年寄りが「いいって！いいからって！」と言うのに森田は彼女の持っていた大きな 鞄を持ってあげようとしていた。まるで引っ張りあいのようだった。こちら側に着く と森田は美菜子に気がついた。
「先生！またお会いしましたねぇ。あ・・旅行に行ってらしたんですか？」と美菜子の福岡土産の袋を見て言った。
「いえ・・・。生徒が福岡の方で入院しているので・・・。」
「お見舞いですか。先生も大変ですね。」と言った時、森田の携帯が鳴った。ちょうど美菜子のバスも来た。

森田が警察に戻ると徳さんは長いリストを読んでいた。
「それが電話のリストですか？」
「あぁ。ほとんどは出版社なんだが、死ぬ前の３～４日は福岡にあるビジネスホテルによく掛けている。」
「取材ですかねぇ？」
「それがおかしいんだ。ほれ。」と雑誌を森田に見せた。
「これは・・・内村が最後に書いた記事ですか？」
「そうだ。出たばかりだ。福岡の建築偽装事件について書いてある。福岡での取材は終わっている。」
「じゃあ、また何か他の事で・・・？」
「行ってみるぞ！」というと徳さんは立ち上がった。

徳さんと森田が入っていったのは、美菜子が泊まったホテルだった。デスクで内村からの電話が誰宛だったかを調べた。

デスク：「あぁ、よく覚えていますよ。内村さんもここに泊まってましたから。」
森田：　「いつのことですか？」 デスク：「えー、今月の初めです。１週間近くおられました。」
森田：　「なぜ帰ってからも電話を掛けてきたんですか？」
デスク：「こちらでは古いお知り合いと偶然会われたようでしたね。それでそのお客様に帰ってからも・・・」
徳さん：「誰ですか、その客は？」

デスク：「なにか内村さんにあったんですか？」デスクの男は客の名前
をいっていいものかどうか迷っていた。

「殺されたんです。」と森田が言うと徳さんがポカンと頭を叩いて「ばか野郎。殺しかどうか分からんだろう！いや‥内村さんがうちの町で亡くなられたもんですから。最後に話された方を探しているんで。」
「そうですか・・・ちょっと待って下さい・・・」とコンピューターをカチャカチャさせると「岸本多恵さんです。今もまだここにお泊りですよ。」刑事たちは岸本の部屋に向かった。

エピソード１０　　内村の顔 刑事たちが３０５号のドアを叩いた。暫くすると中か

ら「どなたですか？」と言う声
が聞こえた。
「警察のもんです。ちょっとお伺いしたいことがあるんですが。」と徳さんが言うとドアが少しだけ開いたので、警察手帳を見せた。岸本はドアの外に出てきた。
「なんかホテルで事件でもあったんですか？」
「いいえ、そうじゃないんです。我々は宮崎県の方から来たんですが、内村武志さんについてお聞きしたいので。ちょっといいですか？」
岸本は躊躇しながら刑事を中に迎え入れた。

「内村さんをご存知ですよね。」と森田が聞いた。
「はい。内村さん、どうかしたんですか？」岸本は心配そうに聞いた。
「宮崎の朝日見町という所で亡くなられました。」
岸本は思わず傍にあった枕を胸に抱きかかえた。
「死んだんですか？！どうして？」彼女の声は震えていた。
「まだ、捜査中ですが、崖から落とされた可能性が高いです。」徳さんが言った。
「落とされた！？殺人・・です・・か？」
「そうかどうかを調べるためにここに来たんですよ。えーっと、岸本さんは内村さん
　と最近電話で話されましたね。」
「はい。・・・１週間程前です・・。」
「どういうお知り合いなんですか。」
「昔・・・大阪に住んでいた時・・私のいた店の常連さんだったんです。」
「このホテルで会われたと聞きましたが。」
「ええ。今月の初めに偶然ここのロビーで・・・びっくりしました。」
「そうですが。電話で何か変わった様子はなかったですか。」
「・・・・・」
「なんでもいいんです。おっしゃって下さい。」徳さんは粘った。
「別に・・・私の子供が入院しているんです。」と急に大きな声で言った。
「それで・・・心配して何回も電話してくれたんです。それだけです。」

「入院といいますとあの向かいの大学病院に？この辺に住まれては、おられないようですね。ホテル暮らしも大変でしょう。僕だったら耐えられないなあ。」森田が言った。
「私も・・・宮崎の方から来ているんです。」
「そりゃ大変ですねー。じゃ、内村さんがなぜ宮崎に行ったかご存じないですか。」
「いいえ・・。何も聞いていません。・・・あの・・内村さんはジャーナリストですから・・・何か取材とか？」

刑事たちは名刺を渡し、礼を言って部屋を後にした。ホテルの表で徳さんはタバコを吸っていた。
森田が出てくると「岸本多恵も宮崎か・・・」
「もしかしたら・・・内村が岸本のだんなに会いに行ったとか。」
「何？」
「いやあ、昔の恋人を取り返そうとして、殺されたとか。」
「馬鹿！なんでわざわざ一人でだんなに会いに行くんだ。」タバコを足でもみ消した徳さんは「行くぞ」と言って歩き出した。

駅のプラットホームで、森田は中年の女性が大きな土産物屋の紙袋を持っているのに気がついた。
「あ！あ！」と怒鳴った。
「どうした。びっくりするじゃないか。」
「土産物だー。」
「それがどうしたんだ？」
「高田先生も持っていたんですよ。今日。」
「それがどうしたんだといっているんだ。」
「だから。高田先生も福岡に来ていたんですよ。」
「だから？」
「生徒が入院しているからお見舞いに来ていたんです。ねぇ、徳さん。それって、岸本の子じゃないですかねぇ？」
「帰ったら早速聞いてみろ。先生が何か知っているかもしれんからな。」
「はい！」と森田は張りきっていた。

---７月２７日　日曜日---
あくる日は日曜日だった。
だが森田は早速、美菜子の下宿を訪ねた。美菜子と家の外に出て、あの日、崖から内村が落ちるのを見た場所に偶然立っていた。
「そうです！生徒の名前は岸本佳代ですよ。なんでご存知なんですか？」
「実は死んだジャーナリストの内村と岸本の母親が知り合いでしてね。死ぬすぐ前に電話で話しているんですよ。」
「岸本さんはどこに？」
「福岡の病院の前にあるホテルです。ずっと泊り込みみたいですね。大変そうだったなぁ。」
美菜子は自分が泊まったホテルだと気がついた。同じところに泊まっていながら、全く会えなかった事が腹立たしかった。

「でもなんで福岡なんでしょうね。宮崎にもいい病院はあるのに。」
「うちの校長のお知り合いが紹介して下さったそうです。」
「生徒さんはいったい何の病気なんですか？」
「分かりません。」
「分からない?」
「佳代ちゃんのお父さんにも聞いたんですが・・・はっきりしなくって。病院の先生も教えてくださらないんです。でも元気そうだと言ってたし・・・」
「お母さんとは会われなかったんですか？」
美菜子は首を横に振った。
「佳代ちゃんにも。」
「面会できないんですか？」
「ご両親がだめだと言っているとか・・・」
森田の目が右に左に動いた。
「刑事さん！佳代ちゃんの病気とジャーナリストの死は関係あるでしょうか？何か変だと思いませんか？」
「いやあ、そう言われればそうですけど・・・。とにかくもう少し調べてみます。なんか分かったら連絡しますから。先生も何か思い出したら、電話して下さい。別になんも思い出さなくても、電話していただいて結構ですよ・・・いや・・その・・はははは・」

美菜子は森田が去った後も表で崖の方を眺めていた。どうしても校長の知り合いが誰なのか知りたくなっていた。

エピソード１１　　教頭の影

---７月２８日　月曜日--- 教頭は柵を直しに貯水場へ向かった。手先が器用なので校長にいつも修理を頼まれて いた。 慣れた手つきで破れた柵を直していく教頭だったが、今回は修理が終わってもすぐに 帰らなかった。持ってきた道具箱から、ポリ容器を取り出し、貯水槽の水を汲んで、 丘の上の方に向かって車を走らせた。

丘の上にはいくつかの建物があった。一番高い建物の上の方に、金色に輝く菱形の中にＳＫの文字が入ったマークがついていた。ＳＫケミカルズ、佐伯敬介の会社である。

車を降りて教頭が建物の中に入ると、受付の女性が座っていた。
「神田と申しますが、佐伯君にお会いしたいのですが・・」
女性は佐伯から連絡を受けていたので「佐伯社長ですね。承っております。どうぞ、こちらのほうへ」と言って廊下の奥にある他接室へ案内した。

教頭は佐伯がＳＫケミカルズの社長だとは知らなかった・・・

佐伯と教頭の付き合いが始まったのは、一年ほど前だった。西見市に珍しい焼酎を飲ませてくれる居酒屋「大吉」があった。偶然その店のカウンターで隣同士に座ったのがきっかけだった。

策士である佐伯と見かけは穏やかだが野心家の教頭が意気投合するのに、さほど時間はかからなかった。お互い素性を明かさず、時々一緒に酒を飲んで話をしていた。

先月、大吉で教頭はかなり酔っていた。
「佐伯君。世の中、不公平だとは思わないかい？・・私は、教頭を長くやっていて、次は校長だと思っていたのに・・・。今は朝日見町の小学校で私より若い校長の下で働いているんだ・・・。不公平だ・・その上、あいつは自分の土地のへんてこな土地の柵の修理まで頼みやがる・・・全く何様だと思ってんだ・・・。」
教頭は酔いつぶれて眠ってしまった。

三日前のことだった。教頭は大吉で酒を飲んでいた。帰ろうと立ち上がった時、格子戸が開き佐伯が入ってきた。
「神田さん。帰られるんですか？もう一杯どうですか？」と佐伯はグラスを飲む真似をしながら言った。
「そうだな。佐伯君が来たことだし、飲みなおすか。大将、おかわり。」
「はいよ。焼酎、お湯割り、いっちょう。」とカウンターの向こうで店主が言った。

佐伯はいつも座るカウンターではなく、教頭に奥のテーブルを勧めた。
「実は、神田さんに折り入って頼み事があるんですが。」
「いいよ。何だね。」人に頼られるとうれしい教頭は軽く返事をした。
「当社は薬品関係の会社で、研究のために、あちこちの貯水槽のサンプルを集めているんですよ。それで朝日見町のサンプルも頂きたいのですが。」
「あぁ。いいよ。あの土地は校長のでしてね。私はいつでも出入りできるからね。」教頭は自慢げに答えた。

「そうですか！やはり神田さんにお願いしてよかった。そうしたらここに水を入れてＳＫケミカルズまで届けてもらえますか。あ、ＳＫケミカルズはご存知ですか。」佐伯はポリ容器を渡しながら教頭に聞いた。「ああ、丘の上だろう。じゃあ、２～３日中には持って行くよ。」教頭はそう言いながら、また焼酎を注文していた。

「神田さん、今日はどうもご足労をお掛けしました。」佐伯は他接室に入りながら言った。
教頭はかばんからポリ容器を取り出し、テーブルの上に置いた。
「これでいいですか。」
「ありがとうございます。神田さんのお陰で助かりました。」佐伯はポケットから封筒を取り出し、「これはほんの気持ちです。ガソリン代だと思ってお納め下さい。」

と言いながら教頭に差し出した。教頭はつかんだ封筒の厚みに驚いたが、研究のためには、これぐらいは、たいしたことないんだと思った。教頭は軽く頭を下げ、他接室から出て行った。

帰りの車の中で「あの佐伯君が東京に本社があるＳＫケミカルズの社長だったのか。」と独り言を言いながら、居酒屋での佐伯を思い浮かべていた。

佐伯は研究室から渡された資料を見て、顔が引きつった。急いであの土地をなんとかしなくてはといけないと思ったが、いい案が浮かばなかった。

エピソード１２　　出会い

--- ７月２８日　月曜日--- その頃美菜子は学校に向かっていた。佳代の入院代を支払っているお金持ちが何か知 っていないかと思い、校長に会いに行くところだった。

校長は相変わらず校庭の隅で畑をしていた。美菜子が近づいても気がつかなかった。
「校長。」と美菜子は肩を叩いた。
「おう・・・高田先生。どうしたんですか？」
「夏休みも大変ですね。お手伝いしましょうか？」
「いやいや、もう今日はこのへんで止めようと思っていたとこです。」
「校長・・・この間福岡に行ってきました。岸本佳代のお見舞いをしようと思って。」
「ああ、教頭に聞きました。どうでした、佳代ちゃんは？」
「それが・・・会えなかったんですが、あの・・・校長のお知り合いがあの病院を紹介してくださったとか？」
「ええ。」校長の答えは短かった。
「どなたか教えて頂けませんか?その方にちょっとお伺いしたいことがあって。」
校長はゆっくりとスコップを拾い上げながら、
「言わないでくれと言われているんですよ。あの人は目立ちたくない人なのでね。」と嘘を言った。「寄付とかされる時も絶対に名前を明かさない人です。」
「そうですか・・・佳代ちゃんの病気について、聞きたかったのですが・・・今度お会いされることがあったら、私が是非お聞きしたいことがあると、お伝え下さいますか？」美菜子は必死に言った。
「はい。そう言っておきます。先生もあまり心配ばかりしないで、夏休みを楽しんでくださいね。」校長は美菜子が校門を出るまで、ずっと見ていた。
「あの佐伯とは、これ以上係わりたくないからなあ。」と呟いた。

美菜子は帰りに道でポケットから名刺を出した。それは森田のだった。彼女はその名刺を暫く見ていたが、思いきって電話をした。森田はすぐ大きな声で返事をした。
「あの、高田ですが・・」

「高田先生！？はい。高田先生・・ははは　ははは。」
「どうしたんですか？」
「いえいえ。何かありましたか？？」
「実はお願いがあるんですか・・・」
「何でも言ってください。どんどんと。」
「岸本佳代ちゃんをあの病院に紹介した人を探しているんです。」
「はあ、また、なんで？」
「佳代ちゃんの病気について知っておられるかと思って・・・」
「でも病気のことは話してくれないんじゃないですか？」
「かもしれません。でも・・・これから佳代ちゃんと連絡を取る時に手伝って頂けるかと思って。」
「いいですよ。校長先生に聞かれなかったんですか？」
「聞きました。でも教えてもらえなかったんです。」
「なんで？」
「目立ちたくない方だとか・・・あの・・お金も出しておられるので、きっとそのことが町中に広がるのがいやなのかも。」
「お金！！？」
「入院代とかも立て替えておられるとか聞きました。」
「そりゃあ、やけに親切な人ですね。分かりました。調べてみます。」

その頃、徳さんはもうすでに岸本多恵について調べていた。多恵の家が朝日見町にあることが分かったので、ますます内村の死と関係があるように思えてきたのだった。徳さんは森田を連れて岸本の夫を訪ねた。夫は内村という人は全く知らない。崖から落ちた人のニュースを見ても関係のない人だと思っていた

「７月２０日の夜はどこにおられました？」森田が聞いた″。
「あそこだよ・・・」と男は少し離れたとこにある居酒屋を指して言った。
「あそこで漁師仲間と飲んでいた。みんなに聞いてくれ。かみさんが、おらんからあそこで晩飯を食っているんだ。」と言った。
徳さんは調べる必要もないと思った。二人が帰ろうとした時、森田が「ああ！」と声を上げた。
「忘れていました。佳代ちゃんの病院・・紹介してくださった人がいるそうですね。」
「ああ。なんか小学校の校長先生の知り合いらしい。」
「名前は？」
「俺は会ったこともないんで・・・うーん、確か、堺・・いや佐伯とか言っていたなあ。」
「失礼ですが・・その人が入院代を立て替えているとか？」
「ああ・・うちは見て分かるように貧乏だからね。入院代とかホテル代とか全部病院の方に送ってくれているみたいだ。」
「でも会われたことはないですか？」
「校長先生に会ってお礼したいと言ったんだが･･･むこうが会いたくないみたいだ。金持ちの気持ちはわからんでねえ。」

森田は徳さんと一緒に警察に戻らず、美菜子のところに向かった。美菜子に佐伯のことを伝えると、美菜子は奥に行って下宿のおばさんに声をかけた。
「おばさん・・おばさん。」
「なんがあったの？」と出てきた。
「おばさん、このへんで佐伯っていうお金持ち知ってますか？」
「さえき・・・さえき・・・ああ、あの人じゃないかな？何年か前にあのでっかい工場ができて、その年にいっぱい夏祭りに寄付した人だよ。うーん、確かＳＫとかいう会社だね。」
森田はそれを手帳に書いていた。「調べてみます。」

森田が帰った後、美菜子は早速おばさんに聞いた場所に、佐伯の会社を探しに出た。しかし、ちょうど後方の土地の辺りで靴のヒールが穴に入り足首をくじいた。
「痛¯。」と座り込んでいた美菜子には、その側の土地など目にも入らなかった。

そこに偶然あの黒い外車が、丘の上から降りてきた。外車の中の佐伯は、あの土地の前で倒れている女に気がつき、あわてて運転手に「止めてくれ。」と言った。 車が急停車すると、佐伯は降りてきて美菜子に声をかけた。
「どうされたんですか？大丈夫ですか？」
「あ・・はい・・痛・・・足をくじいちゃって。恥ずかしい。」
「それは大変だ。どうぞ乗っていってください。お送りします。」と彼女に手を差し伸べた。
びっこを引いても歩けそうにないと思った美菜子は、その言葉に甘えることにした。彼女は後ろの左側に乗った。
「どこに？」と運転手は聞いた。
美菜子は本当は佐伯の会社に行きたかったが、自分の下宿の住所を言った。
「あの・・・この上にＳＫ化学とかっていう会社があるって聞いたのですが。」
「ええ。うちの会社ですが。」と佐伯が答えた。
「え？もしかして佐伯さんですか？」美菜子はこの偶然に喜びと緊張を同時に感じていた。
「私・・・・今度新しく小学校に派遣された高田と言います。」
佐伯はどこかで聞いた名だと思った。
「岸本佳代ちゃんの担任になりました。」
佐伯は佳代の見舞いに行った人だと思い出した。一瞬会いたくない相手を、乗せてしまったと思ったが、次の瞬間これは天からの授かりものかもしれないと思った。
「岸本佳代？」
「はい。佐伯さんが、もしかして佳代ちゃんの福岡の病院を、紹介して下さった方かもと思って・・・」
「ああ。そうです。そういえば『佳代ちゃん』だったな。」
「あの・・・なんであんなにいい病院なんですか？」佳代ちゃんの病気は難しいんですか？」
「い・・え・・・」佐伯は息を吸った。
「校長先生から病院に行けずに、家で寝ている子がいると聞きましてね。僕の親友が福岡の大学病院で医者をしているので、そこなら融通がきくと思って紹介させてもらっただけです。詳しいことは聞いてませんが。」

「そうですか・・あまり長い入院だから心配で。」
「高田先生はいい先生ですね。生徒さんのことそんなに心配されて。」
「いいえ。私はいい先生じゃなんか。」と美菜子は小さい声で言った。

車はその頃には、下宿前に着いていた。 美菜子に肩を貸して家の中にまで入ると「では、また。」と佐伯は帰りかけた。
「あの・・・」佐伯が振り向いた。
「あの・・もし佐代ちゃんに話したかったら、佐伯さんからお友達の先生に伝えて頂けますか？」
少し間をおいて佐伯は頷いた。「これが僕の電話です。」と名刺を出した。

車は内村の落ちた岬の側を走っていった。佐伯は美菜子の行動をよく知っておくべきだと考えていた。

西見市はこちら

```
                ＳＫ
                   \
                     \
                       \
                     校長の土地
                          \              小学校
                             \        /
                                \   /
                                 / -- 校長の家
                               /
                             / 下宿                    岸本
-------------------------------------------------------
-------------------------------------------------------
                                          船    船    船   |
                                \   /                      |
 佐伯の別荘                                 []--------------
                             \       /       灯台        防波堤
                                崖

        海   海   海   海

                 | 四国

              側
```

エピソード１３　　瞿の日の出来事 ＳＫケミカルズから下の空き地を見下ろしてい

る男がいた。彼は野村工場長。彼の顔
には暗い影があった。

---回想シーン７月の初旬--- その日、トラックで原料が届くのを野村は
今か今かと待っていた。
「遅いなぁ。いつもならこんな時間にならないんだが・・」時計を気にしながら野村は部下に言った。
「瞿が降り出したので遅れているんでしょうかね。それにしても遅すぎますね。連絡を取ってみましょうか。」若い部下は取引先に電話をかけてみることにした。

「工場長。時間通りに出たらしいのですが、道が混んでいて、もう少しかかるとのことです。」
「うーん、そうか。仕方ないな。」野村は娘と前々から約束したことが気になっていた。

普段から仕事優先で、家庭は二の次になっていた。今日は娘の１０歳の誕生日なので、食事に連れて行くと約束していたのだった。夕方、妻からも念押しの電話があったのだった。

暫くしてトラックが到着した時、あたりはすでに真っ暗になっていた。

「すみません。道がすごく混んでいて、遅くなってしまいました。すぐ、倉庫に運びます。」と運転手は申し訳なさそうに言った。
野村は、たくさんある原料を今から倉庫に片付けるとなれば、時間がかかってしまい、娘との約束を破ることになってしまうと思った。

「今日はもう遅いので、明日の朝一、倉庫に運ぶから、ここに置いてくれて結構だ。」
「でも・・・いいんですか。」
「ああ、一晩ぐらい大丈夫だ。ご苦労さん。」野村はしっかりと梱包してある原料を見ながら運転手に言った。そして、急いで家に帰った。

夜中に瞿はますます激しくなり、風も強くなってきた。側にあったプラスチックの板が飛び、木の枝が折れ、2 つの袋に穴が開いてしまった。瞿で流れ出した薬品が、坂の下へ滝のように流れ出していった。

あくる日の早朝、荷物が気になった野村は会社にやってきて、二つの袋が空になっているのを見つけた。あわててその袋を処分した野村は、佐伯に電話をかけた。

「もしもし、野村ですが、朝早くからすみません。今、よろしいでしょうか。」
「ああ。なんだ。」時計を見て、まだ 5 時前だと知った佐伯は短く返事をした。

「昨夜の罍で、昨日届いた原料の袋が破れて、二袋ほど流れ出してしまったのですが・・・」
「なんだと？」佐伯は眠気が吹き飛んでしまった。
「倉庫に入れていたのに、どうして流れ出たんだ？」
「社長。申し訳ありません。昨日、荷物の到着が遅れたので、そのまま外に置いて帰ってしまいました。」
「工場長の君が、なんてことをしたんだ。劇薬だぞ！」
佐伯は怒りのあまり、絶句してしまった。
「申し訳ありません。」野村の声はだんだん泣き声のようになっていった。
佐伯は「すぐにそちらへ向かう。とにかくこのことは君と私だけの胸の中に収めておこう。分かったな。」
「はい・・・誰にも口外しません。」
―――――――――――――――

急に野村は肩を叩かれた。それは部下の若い男だった。
「工場長！何度も呼んだのに、ぼーっとしてましたね。」
「あ、あぁ。なんだ？」
「なんだじゃありませんよ。トラックが今日の荷物を取りに来ましたよ。」
「あ、ああ。分かった。今、行く。」
そう言いながらも、野村はまだ下の空き地を見つめていた。

―――

エピソード１４　　スポーツパーク 美菜子は下宿のおばさんが作ってくれ

た氷袋で、腫れた足を冷やしていた。
「ほんとにびっくりしたわね。あの佐伯さんに送られて帰って来るんだから。黒い外車が停まったときは、どこの大臣様が来られたのかと思ったよ。なんであっちの方に行っていたの。」
「いえ・・ちょっと。ＳＫってどんな会社かと思って。」
「ふーん。まぁ、美菜子さんみたいな美人だから、乗せてくれたんだよ。私みたいなおばさんだったら、気も付いてくれなかっただろうね。佐伯さんて遠いとこから見たことしかなかったけど、かっこいい男じゃないの。独身かねぇ。」
「さぁぁ。もっとお歳を取った方だと思っていました。校長のお知り合いだと聞いていたので。」
そう言いながら美菜子はふと不審に思ったことがあった。佐伯は美菜子の想像していた、優しそうなお金持ちのおじいちゃまではなかった。あんな人が見知らぬ子のために、お金を出し続けるのだろうか。病気のことも詳しく知らずに。
ぽーっとしている美菜子の袋を、おばさんが取り上げたので、彼女はハッとして「あぁ、ありがとうございます。」と言った。

その夜、佐伯は自分の別荘でくつろいでいた。別荘は海に飛び出して岸壁にあり、海側は全部ガラス窓だった。彼はその窓の前に立ち、荒れた海の波が押寄せるのを見ていた。

手にはブランデー・・。モーツアルトのドン・ジョヴァンニが大きく鳴り響いていた。彼がブランデーを置いたテーブルには興信所からの報告書があった。そこには山田聖子の事件の記事が載っていた。

---７月２９日　火曜日--- そのあくる日だった。思いがけないことが起きた。佐伯が見舞いに来たのだった。
「高田先生はいらっしゃいますか。」下宿のおばさんは慌てて「はいはい。いらっしゃいますです。」と言いながら美菜子 を呼びに言った。
美菜子はびっこを引きながら降りてきた。
「佐伯さんだよ。佐伯さん。」とおばさんは興奮していた。

「あぁ、高田先生。足の具合はどうですか。心配でちょっと寄ってみました。」
「わざわざありがとうございます。もう歩けるようになりました。昨日は本当に助かりました。こちらからお礼に伺わなくてはいけないのに。」
「そんなこといいですよ。それより、あの後お医者さんに連れて行ってあげればよかったと、後悔していたんです。気がきかなくって。」
「いいえ。大丈夫です。大したことはありませんから。」
美菜子はもう一度お礼を言うと、佐伯は出て行こうとした。
「あのちょっと。」美菜子が呼び止めた。

「こんなことお聞きして失礼かと思うんですが・・・」
「何ですか？」
「もしかして岸本佳代ちゃんのこと、もっとご存知なのでは？？　いいえ・・・教えていただけなくてもいいんです。きっと言えない理由が、岸本さんにもあるでしょうから・・」
「なんで僕がもっと知っていると思うんですか。」
「いえ・・その・・・見知らぬ子のために、何も聞かずにあんなにされるとは・・・」
「おかしいと？」
「ごめんなさい。私、本当に失礼なこと言ってますね。」
「ちょっと時間ありますか。」と言うと佐伯は、美菜子の手を引っ張って車に乗せた。

車はあの空き地で停まった。 外に出ると佐伯はじっと空き地を見つめながら、「僕はここに大きなスポーツパーク
を造りたいんです。この町のみんなが使える。野球やサッカーや、みんなが出来る場所を造りたいんです。」
「寄付なさりたいんですか。」
「またおかしいと思われるでしょうが。」
「いえ。ほんと・・・私・・あの。」
「僕は子供の時に、弟を事故で亡くしました。この朝日見町近くでです。夏には毎年弟のお墓参りにここに来ています。その頃、うちは裕福ではなくて、いい病院にも入れてやれなかったんです。弟は野球選手になるのが、夢でした。いつも家の裏の空き地で練習していたのですが、ボールを追って道にでたとこを、車で撥ねられたのです。だから」と言いながら佐伯は美菜子の方を向いた。

「だから、弟に出来なかったことを、岸本さんにしてあげたい。そして、みんなが安 全に野球の出来る場所を提供したい。それだけです。」
「ごめんなさい。そんなこと何も知らずに。許して下さい。」
「気にしないで下さい。それより、・・・・・この土地が誰のものかご存知ですか。」
「いいえ？」
「あなたの学校の校長先生のものです。ご両親が畑として使われていたらしいですが、もう何年も空き地のままでほってある。もったいない。高田先生。あたなからも校長にお願いしてもらえませんか。スポーツパークの夢を実現させたいのです。協力して下さい。」
美菜子は小さく頷いた。

佐伯は自分はここから歩いてＳＫに行くからと言って、運転手に美菜子を送らせた。

エピソード１５　　時計 今日も小山校長は学校で畑の世話をしていた。この２～３

日、子どもたちが来ていな
いので、野菜がたくさん実っていた。収穫の楽しみを子どもたちに残していた小山だったが、これ以上、実らせておけなくなったので、今日は収穫することにした。

「ただいま。」台所で夕飯の支度をしていた直子が、エプロンで手を拭きながら玄関まで出迎えた。
「お帰りなさい。暑かったでしょう。」
「あぁ。今日は子どもたちが来なかったので、トマトときゅうりを持って帰ってきた。裏のおばあさんに、あげたらどうだ。」
「まあ、立派なトマトだこと。そうね。この間、田中のおばあさんに干物を頂いたことだし、お返しを考えていたところだったの。今から持って行って来るわ。」
エプロンを外し、手で髪をちょっと整えて直子は出て行った。

小山は着替えをすませた後、書斎の椅子に深く座った。 書斎の片付けは直子に頼まず、小山自身がしていた。結婚当時、直子が掃除をするた びに、よく言い争いになっていた。それ以来、直子はどんなに散らかっていても、こ の部屋のものには、指一本触れないようにしていた。

小山は机の引き出しから、鎌倉彫の文箱を取り出した。中には腕時計が大事そうに布に包まれて入っていた。長い年月を経て、真っ白だったはずの布が生成り色に変色していた。小山はしばらく腕時計を見つめていたが、やがて腕組みをし、天井を見上げながら、長いため息をついた。

「ねえ、あなた。」直子がふいに書斎に入ってきた。
「せっかく、この間のお礼にと思って、お届けしたのに、またこれを頂いちゃったわ。」
直子はビニール袋をちょっと持ち上げた。

小山はすぐに文箱の蓋をしたが、直子に中身を見られたかもしれないと思うと、言葉が直ぐに出てこなかった。
「そ、それはかえって悪かったなぁ。今度、出かけたときに、おばあさんには何か買ってこよう。」
「えぇ。じゃ、お願いね。食事の用意ができたら、呼びますね。」
「あぁ。」

小山は直子が台所へ行ったのをそっと確かめてから、腕時計を丁寧に包みなおした。直子に見られただろうか・・・でも彼女は何も尋ねなかった。 彼女の性格だと、見たのなら、絶対何か言うはずだ。たぶん何も見なかったのだろう と自分に言い聞かせた。

エピソード１６　　企み 野村はいつものように、帰る前には工場の周

りを点検して廻っていた。
そこへ佐伯が一人で歩いて帰ってきた。

野村は走りよって「社長・・・さっき上から見てたんですが、下の空地に女性を連れて来られてましたね。」
「あぁ。小学校の先生だ。あの岸本っていう子の担任のね。」
「なんで小学校の先生をあそこに連れて来るんですか。なんか聞かれたんですか。」
野村は興奮していた。
「心配するな。ちゃんとうまく言ってある。」
「うまくって何を言ったんですか。彼女は何を知っているんですか。」
「心配するなって言っているだろう。いいか。彼女を味方につければ、あの土地も手に入りやすくなる。俺に任せておけ。」
「味方になんて言っても・・・あまり関わらない方が」
佐伯が途中、手を止めるように言った。
「それより。この間の水を調べたら、思ったよりはるかに濃度が高かった。」
「ええ？そんなに？あれから瞿も何回も降ったのに・・・。」
「とにかくあの土地を手に入れるのが先決だ。」と言うと佐伯は野村の背中をぽんと叩いて、ビルの中に入って行った。

佐伯のオフィスは長四角で、右側の壁には三国連太郎に似た先代の社長の肖像画が掛けてあった。佐伯は自分のデスクの上に置いてあるファックスを見て「ふう。」とため息をついた。
椅子に座るとノートパソコンで何かうちだした。

エピソード１７　　優子

---７月３０日　水曜日---
「佐伯様、いつも当機をご利用いただき、誠にありがとうございます。何かご用がございましたら、お申し付け下さい。」
フライトアテンダントは佐伯の目の高さに合わせ、膝をついて挨拶をした。
「すまないが、コーヒーを持ってきてくれないか。」
「少々、お待ち下さい。すぐお持ちいたします。」
東京へ向かう飛行機の中で佐伯の顔色は冴えなかった。お昼から開かれる本社の会議資料に目を通していたが、コーヒーを飲み干すと座席を倒し、仮眠を取ることにした。

羽田空港に着くと、迎えの車が待っていた。佐伯は後部座席に乗り込むと、空港から４０分ぐらいで地下駐車場に到着した。このビルの３５階がＳＫケミカルズの本社である。部屋に入り、窓の外を眺めた。社長室の窓から東京タワーが一望できたが、佐伯の目には入っていなかった。ノックの音で佐伯は我に返り「どうぞ。」と声をかけた。

紺色のスーツを着たショートボブの女性が入ってきた。
「失礼します。コーヒーはこちらに置いてよろしいですか。」
「あぁ。ありがとう。」佐伯は椅子に座り、目頭に手をあて、目を閉じた。
「社長、ずいぶんお疲れのようですね。」
「朝日見町の工場で、ちょっといろいろあってね。まぁ、大したことないんだけど･･･。一度、君もあちらの工場に行ってみないか。新鮮な魚料理を食べさせてくれる店に案内するよ。」
「ありがとうございます。機会があれば、また同行させて頂きます。」と言って部屋を出て行った。

秘書室長である小田優子は数年前まで、佐伯の秘書をしていた。上品で美人だが、微笑むとさすがに歳は隠せなかった。

夕方、秘書室の電話が鳴った。
「はい。秘書室の小田でございます。」
「佐伯ですが。小田さん、今晩、空いてますか。先方の都合で、今日の会食が急にキャンセルになってしまってね。よかったら、久しぶりに一緒に食事でもどうですか。ちょっと見てもらいたいものもあるし。」
「かしこまりました。大丈夫ですよ。」
「それでは、６時に。」佐伯は電話を切った。

佐伯と優子は会食のために予約していた料亭へ６時半頃到着した。
「佐伯様。いつもありがとうございます。」女将が挨拶に出てきた。
「急なキャンセルで今日は悪かったね。そのかわりといっては何ですが、美人をお連れしましたよ。」
「あら。小田様。お久しぶりでございます。相変わらずお美しくていらっしゃいますね。」女将はそう言いながら、庭園の見える個室へ二人を案内した。

「こうして、小田さんと食事をするのは、久しぶりですね。」

「そうですね。最近、社長はよく朝日見町の工場へ行っておられますしね。」
「工場のすぐ側にね、スポーツパークを造りたいと思っているんですよ。」
佐伯は鞄から＜スポーツパーク事業計画案＞と書かれた資料を優子に差し出した。
「先ほど、見てもらいたいものがあると、おっしゃっていたのはこれですか。」
優子は事業計画案に目を通していた。そして、あるページで優子の目が留まった。

エピソード１８　　近すぎる その頃、野村は家路を急いでいたが、西見市に帰る途

中で、娘の好物の水羊羹を買っ
て買えることにした。野村の軽自動車は美菜子の下宿の前に止まった。

おばさんが水羊羹を箱に入れている時、美菜子が奥から出て来た。野村は彼女が佐伯と、空地にいた女性に似ているのに気がついた。

「どこ行くの？」
「ちょっと涼みたくって。」

水羊羹を渡されても、そのまま店を出かけた野村におばさんは「ちょっとあんた。ちゃんと払って下さいよ。」と呼び止めた。 野村はぼうっとしながらも、札を手渡して「つりはいい。」と言って出て行った。お ばさんは首を傾げていた。

「彼女が岸本の担任・・・ここに住んでいたのか・・・」

エピソード１９　　竜馬？ 佐伯から渡された計画書の中から、優子は見覚えのあ

る懐かしい名前を発見した。
小山竜馬・・同姓同名なのだろうか。

「小田さん、どうかしましたか。」
「え、・・・いえ。」
佐伯は優子の返事が一瞬、ためらったのを見逃さなかった。
「何か気になるところがありますか。」
「いいえ。そんなことないです。企業イメージもよくなりますし、いい計画だと思います。」
「小田さんにそう言ってもらえると、うまくいくような気がしますよ。その土地のことで、話が前に進まないものでね。」
「土地がどうかしたのですか。」
「持ち主が売りたがらなくてね。申し分のない条件を出しているのに、かたくなに首を縦に振らなくって。」

「そうですか。どうしてでしょうね。こんな立派な計画なのに・・・」
佐伯は優子が何も言い出さないので、あえて聞きださないことにした。

食事もそろそろ終わりに近づき、よく冷えた果物を食べている時、佐伯の携帯が鳴った。
「ちょっと失礼。」と優子に声をかけ、廊下に出て行った。
佐伯が席を外している間に、優子は計画書に書いてある小山の住所を手帳に書き写した。

まもなく佐伯は戻り「すみません。用事ができたので、そろそろ行きましょうか。」と言いながら出口の方へ手を差し出した。 佐伯に自宅まで送ると言われたが、優子は丁寧に断り料亭の前で別れた。

自宅に戻った優子は部屋の電気も点けずソファに座った。 優子が大学一

年生だった時、サークルの先輩だった小山竜馬・・・

「はじめまして。小山竜馬です。坂本竜馬と同じ竜馬。親父がね、竜馬の大ファンで僕の名前を竜馬にしたんですよ。お陰で誰にでも、すぐ名前を覚えてもらえますよ。そのかわり苗字は忘れられてしまうんですがね。」
優子は初めて会ったときの小山の笑顔を思い出していた。優子は自分が知っている小山かも知れないと思い、今度の週末に朝日見町へ行ってみることにした。

エピソード２０Ａ　　佐伯の顔

---- ７月３１日　木曜日 ---- 西見市の警察では徳さんが黒板の前に立っていた。

黒板には岸本、内村、佐伯の名前
が書いてあり、矢印で繋いであった。

徳さんは森田に言った。
「内村が何故、朝日見に来たかがカギだ。内村と朝日見との接点は岸本。」
「やっぱり佐伯に会いに来たんでしょうかね？」
「そうとは限らん。岸本の子に関係しているとすれば・・・小学校に行ったのかも知れない。岸本の子に関係がないとすれば・・・」
「すれば？」
「さっぱり分からない。」と言ってとぼけた顔をした。
「まず佐伯に会ったかどうか調べましょう。」と森田は言った。

徳さんと森田が部屋を出ようとした時、あの貧相な刑事が部屋に入ってきた。 彼は情報を集める係りで、デスクワークばかりの刑事だった。
「徳さん、佐伯について少し分かりました。

東京生まれで４３歳です。父親の佐伯良介がパートナーの小西晃と作ったＳＫケミカルズを、父親が亡くなった５年前に継いでいます。一人息子です。母親も早く亡くなっています。良介は朝日見町の隣にある有谷町の出身で、そのせいか朝日見町に４年前に工場を建てました。普段は東京にいるようですが、７月の父親の命日には必ずこちらの方に来ているようです。」
「ＳＫケミカルズは何を作っている会社だ。」
「えっと、農薬とかです。この辺でもよく売れているようですね。」
「よし、行ってみるか。」と徳さんは森田と出て行った。

徳さんたちがＳＫの門を通って背の高いビルに入ると、受付の女性がこちらを向いていた。徳さんは警察手帳をぶらりと見せながら「佐伯社長にお会いしたいんですが。」と言った。 驚いた顔の女性は一瞬、戸惑ったが「すみません。社長は昨日、東京の方に帰りまし た。」と返事をした。
「そうですか・・・いつも７月には、こちらにおられると聞いていたのでね。」
「はい。７月の初めには。でもそれ以外の時は、ほとんどおられません。」
森田と徳さんは顔を見合わせた。手帳をめくりながら、「あぁ、７月２０日には、こちらにおられましたか？分かりますか？」
「おられなかったと思います。今回は１週間足らずでお帰りになったので。」
「いやぁ、助かりました。ありがとう。」と言うと徳さんは、にやっとした。

その二人がドアを出る時に野村がビルに入ってきた。刑事たちがいなくなると、野村は受付に聞いた。
「あの人たちは？」
「警察の方です。社長に会いたいとおっしゃったんですが。」
「何でか言ってた？」
「いいえ・・ただ・・・７月２０日に、ここにいたかって聞いてました。」
野村の手が知らないうちに汗ばんでいた。

表に出た刑事二人は、門のすぐ側に立ち止まった。
「ほとんどこっちにいない人間にわざわざ日曜に会いに来る訳ないよなぁ。」
「はい、僕もそう思います。」

「おい、あのレンタカーは見つからないのか？ＵＦＯにでも持っていかれたのか？」
「朝日見町で赤い車を見かけた人はいません。」
徳さんは顔を歪めて、「もっと他も探せ！」と怒鳴った。

エピソード２０Ｂ　　内村の疑問

その頃、佳代の父親は福岡のホテルで多恵と話をしていた。
「本当にびっくりしたぞ。あの崖から落ちた人とお前が知り合いだったとは。」
「わざわざ来なくってもいいのに。」
「来ちゃあいけないのか？なんか都合でも悪いのか？」

「そうやないけど。漁を休んでまで。」
「どちらにしても海はしけてる。なぁ。あの内村って言うやつは何で朝日見に来たんだ？俺に会いにか？」
「何であんたに会いにいくのよ。」
「じゃ、何しに？」
「知らんわよ。佳代のことを、ぐちゃぐちゃ聞いていたけど。」と言いながら多恵は、窓の側に立ってその頃の話をした。

――――――――――――

ロビーで偶然会った内村と多恵は、飲み屋で昔話に花が咲いていた。
「多恵ちゃんの娘さんに会いたいなぁ。可愛んやろうな。明日、見舞いに行くわ。」
「あかん、あかん。」
「なんでや？」
「あの子は誰とも会いたくないんよ。」
「何でまた？」
多恵は佳代の状態を話した。
「そんなにひどいんか？なんの病気やねん？」
「なんか生まれつきの珍しい体質でアレルギーやとか。」
「なんのアレルギーやねん？」
「それがなあ、うちもよう分れへんねんけど、あの子がいつも遊んでた広っぱの草花ちゃうかって、ゆうてはんねん。」
「へんやなあ。もうそこにおれへんのに、治れへんのか？」
「だんだん良くなってるってゆうてはるわ。」

内村は大阪に帰った後も、多恵に電話してきた。
「多恵ちゃん。娘さんのことやけどな。その広っぱに変なもんでもあったんとちゃうか？」
「そんなことないと思うよ。他の子も遊んでるし。」

２日後も電話があった。
「やっぱりおかしいで。娘さんのブツブツは、にきびみたいねんやろ？そんなアレルギーないで。」
「そやから珍しい体質やって言ってはるやん。」
「校長さんが、広っぱ持ってはんねんやろ？その病院も校長さんが、探してくれはったんやろ？きっと、後ろめたいことがあるんちゃうか？」
「校長さんの知り合いが探してくれはったんやよ。」
「おんなしようなもんや。ちょっと調べてみる価値はあるなぁ。」

――――――――――――

「そう言ってたのか？」と岸本は言った。「なんか広っぱを調べに来たのかなぁ？」
「調べてても何もないのに。」と多恵は言った。
「あの人のいい校長先生が、変なもん広っぱに置いておきはれはんよ。疑ごうたら

　ばち当たるわ。酔っ払って崖から落ちたんと違う？だらしのない人やから。」

エピソード２１　　教頭の夢

「はい、神田でございます。」教頭の妻が電話にでた。
「おとうさん、教育委員会の花田さんから電話ですよ。」
奥の和室にいた教頭は、急いで電話をとった。
「お待たせいたしました。神田です。・・はい。・・はい。・・そうですか。」
目の前に相手がいないのに、ぺこぺことお辞儀をしている教頭は、まるでコメツキバッタのようだった。

電話を切った教頭は、テレビを観ていた妻に向かって「おい、いい話だぞ。隣町の小学校に来年、校長のあきがでるらしい。で、私にどうかといって、打診してきたぞ。」
「あら。いいお話ねー。校長になるのが昔からの夢でしたからね。」
「あぁ。わしもいよいよ運が向いてきたぞ。花田さんには前々から付け届けをしているし、教育委員会に取り入ってきた甲斐があったな。よし、明日、校長に会ってくるか。」
教頭は上機嫌で和室に戻って行った。

--- ８月１日　金曜日 --- 次の日、教頭は手
土産を持って校長を訪ねた。
「今年度で隣町の校長がやめるのをご存知ですか。」
「あぁ。そうらしいですな。」
「それで、教育委員会のほうで、私に、という話があがっているらしいのですが・・・」
「教頭先生は情報が早いですな。」
校長の耳にも入っているということは、いよいよ現実味を帯びてきて、教頭はうれしさを隠せなかった。そして、校長の次の言葉を待っていたが、何も言ってくれないので痺れを切らし、自分から言い出した。

「校長からも推薦していただけますよね。」
「その話が本決まりになったら、その時にまたこの話をしましょう。それより、裕太君のことですが・・・・」校長は話を濁し、話題を変えた。

教頭は校長が快く推薦状を書いてくれると思っていたのに、校長の返事に愕然とし、そのあとの話はうわの空だった。

エピソード２２　　鏡の中 刑事たちはオフィスでま

たあの黒板を見つめていた。

「もし・・・もしも、内村が小学校に行ったとしたらだ・・・これしかないな。」と徳さんは校長の字を指差した。
「えええ？校長先生が殺人？！」と森田は驚いた。
「そうじゃない。会いに来た相手は校長だろうと言っているんだ。」
「じゃあ、誰が殺したんです？」
「そんなこと俺に分かるか。だがな、校長に会わせたくない人物がいたとしたら・・・」
「ああ、そういうことですか。校長はきっと会ってませんよね。だって内村が死んだニュースを見ても、何も言ってこないんですから。」
「校長に話を聞いてみますか。」と徳さんはまたニヤリとした。

その頃、佳代は病院で鏡を見ながら、事故の日のことを思い出していた。あの日、モーニング娘。に憧れている佳代は、踊りの練習を校長の空き地でしていた。帽子は風に飛ばされて貯水槽の柵を超えた。佳代は柵をよじ登って中に入り、水に浮いているお気に入りの帽子に、手を伸ばしたが届かなかった。無理をしているうちに、貯水槽に頭から落ちてしまった。

立入禁止のところに入ったと、親に言うのが嫌な佳代は、帰りに海に入って汚れを落とし、家では海に帽子が落ちたと嘘をついたのだった。しかし、その夜、激しい腹痛で倒れてしまったのだった。腹痛は2日程で治ったが、佳代は弱りきっていて登校しなかった。

入院して5日程してから皮膚にできものが、現れはじめたのだった。佳代は初めは鏡を見るのも辛かった。しかし、絶対治ると念を押されてからは、ずいぶん明るくなっていた。今でも鏡を見るたびに、あの日のことを思い出すのだった。

その頃、美菜子は下宿のおばさんに勧められ、佐伯にお礼をしようと考えていた。美菜子が取り出した佐伯の名刺には、東京の住所と電話番号が載っていた。
「もう東京に帰られたのかしら？」と思いながら勇気を奮って番号を押した。電話に出たのは小田優子だった。
「あの・・・佐伯社長はそちらにいらっしゃいますか？」
「どちらさまですか？」
「私・・・高田と言います。朝日見町の小学校の・・」
「少々お待ち下さい。」と言うと優子は電話のボタンを押した。
「社長。朝日見の小学校の高田という方からお電話ですが、どうされますか？」
「繋いでくれ。」
「もしもし。高田先生ですか。どうしたんです？」
「いえ・・もう東京にお帰りになってしまったんですね。」
「ちょっと急用が出来たので。何か僕に用が？」
「いえ・・この間のお礼をしたくて。それに校長と会って頂こうと思ったんですが・・・スポーツパークのことで。」
「校長とはもう何度も話しています。僕とは相性が悪いようですね。高田先生からうまく話しておいてもらえますか？」
「はい、もちろん。お礼は・・・じゃ、東京の方に送らせてもらいます。佐伯さんのような裕福な方には何がいいか分かりませんが・・・」

「お礼なんていいですよ。何もしていないのに。それに、もうすぐまたそちらに戻ろうと思っているので。やり残した事がありますからね。」
「そしたらその時に持ってあがります。」
「本当に丁寧な方だなあ。もし、どうしてもと、おっしゃるのなら・・・そこのおうちにでも招いて下さい。」
「ここに？？？」
「ええ。なにかいい感じのお店じゃないですか。昔の日本の家庭の匂いがする。そこのおばさんと高田先生の手料理でもいただきたいと思って。」
「ええ？こんなへんぴなとこ」と言いながら美菜子は周りを見渡した。おばさんがじろっと睨んでいた。
「忙しくって外食しか食べてないんです。家庭料理なんて何年ぶりか。」
「分かりました。ほんとにこんなとこでいいのなら。おばさんに言っておきます。」
「じゃあ、そちらに戻ったら電話します。校長のことよろしく。」と言って佐伯は切った。

美菜子が電話の内容をおばさんに告げると、おばさんは興奮していた。
「あの佐伯さんが。あの佐伯さんが。私の手料理を食べたいなんて。」
奥に帰っていたおじさんに大きな声で自慢していた。おじさんは新聞を見たまま「変わった人だ。」と一言、言った
「美菜子さん、美菜子さん。毎日外食ってことはやっぱり独身だよ。はははははは。気に入られたら玉の輿だよ。ふふふふふ。さあて、何を作ろうかしらね。」と今から台所に入って行った。

エピソード２３　　優子の訪問

---８月２日　土曜日--- 土曜日の朝、優子は東京を出発した。宮崎空港に着くと小雨がぱらぱらと降りだした。 空港でタクシーに乗り、小山の住所を運転手に見せた。長距離ということでタクシー の運転手は、上機嫌で優子に話しかけてきた。

「お客さん、どちらから来られたんですか。」
「東京です。」
「あー、東京ね。娘が東京の大学に行ってね。休みになっても全く帰ってこないんですよ。こっちは田舎だとか、ブツブツ言ってね。東京の大学なんかに行かすんじゃなかった。」

優子は延々と喋り続ける運転手の話に適当に相槌をうっていた。窓の水滴が横に流れていくのをぼんやりと見ながら、小山が優子の知っている人物であることを願っていた。優子が小山の家に着くころには、雨が本降りになっていた。

表札に小山と書かれてあるのを確認して、優子は少し緊張しながらインターホンを押した。中から直子が返事をしながら出てきた。

「小山竜馬さんは、いらっしゃいますか。」
「どちらさまでしょうか。」直子はどこかで見覚えのある人だなと思いながら尋ねた。
「小田優子と申します。人違いかもしれないのですが、小山さんは大学の先輩で」と返事をしていると、直子は大きな目をますます見開いて言った。
「あーっ。もしかして優子さん？私、北野直子よ。覚えてる？すっかりおばさんになってしまったから、分からないわよね。優子さんは変わってないわ。」
優子の張り詰めていた緊張が一気にとれ、自然と笑みがこぼれた。
「いえ。そんなことないです。直子さんのこと覚えていますよ。先輩とご結婚されたんですか。」
「そうよ。そうそう。今日は小山もいますし、お上がりになって。あなた。あなたー。」直子は急いで小山を呼びに行った。

優子がソファに座って待っていると、奥から小山がやってきた。
「久しぶりだな。元気かい。君は、あの頃と全然変わってないね。」
「またまた、先輩。とんでもないです。先輩も昔のままですよ。」お互い顔を見合わせ、思わず笑ってしまった。

「どうしたんだい。突然こんなところまで。連絡ぐらいくれれば、迎えに行ったのに・・」
「先輩がこちらに住んでおられるとは、知らなかったのですが、風の便りで聞いたものですから。」
「ほぉ。僕も有名になったもんだな。」小山はどこで聞いたのか聞こうとした時、直子がアイスコーヒーを持って入ってきた。

「話に花が咲いてるわね。ね、優子さん、今日はうちに泊まっていくでしょう。」
「空港でホテルに予約の電話をしたので・・」
「せっかく来たのだからそんなこと言わず、こんなところだけど、よかったら泊まってってちょうだい。ね。あなた。」
「そうだよ。うちでゆっくりしていけばいいじゃないか。」
「ありがとうございます。じゃあ、お言葉に甘えて。」と言い、優子はホテルにキャンセルの電話をした。

お互いの近況報告や学生時代の話を和やかにしていたが、優子が小山に会いにきたのには理由があり、夕食後、小山たちに話しを切り出した。

「私、田口さんと結婚の約束をしていたんです。でも３０年前、彼が突然いなくなってしまって。普段から度々ふらっといなくなる人でしたから、その時はいつものことだと思って、気にしていなかったの。でも連絡だけは必ずくれる人だったから、事故にあったかもしれないと思い、警察に問い合わせてみたり、彼の友人に聞いてみたりしたけど、なんの手がかりもなくて・・・」
「そうだったの。」直子は優子の気持ちが痛いほどよく分かった。

話を聞いた小山は青ざめていたが、優子からすれば、友人の行方不明の話でショックを受けているように見えていた。

「君と田口が婚約していたのか・・残念だが、田口とは卒業して以来、連絡をとっていないんだ。田口のことだから、どこか、第一線でバリバリとやっていると思っていたよ・・・」小山は呟くように言った。周りは重い雰囲気に包まれていた。
優子はさすがに落胆した表情を隠せなかった。

「ごめんなさい。もう３０年も経ったし、諦めたつもりだったのだけど、先輩の住所を知ったら、どうしても訪ねてみたくなって・・。いまさら、彼を探してもどうしようもないのに・・・。」優子は自分の腕時計を触りながら言った。
直子が優子の手首に視線を落としたのに気がつき、「この時計ね。彼とお揃いなの。彼の誕生日に同じものをプレゼントしたのよ。」と言った。
「そう。素敵な時計ね。」直子はどこかでこの時計を見たような気がしていた。
「もう。この話はおしまい。久しぶりの再会だから、楽しく飲みましょう。」と優子は明るく振舞った。

翌日、直子は家の前で優子に「また、いつでも来てね。」と別れを告げ、小山が優子を空港へ送って行った。 家に残った直子は昨日の優子の時計が、気になってしかたがなかった。小山の書斎に 入り、机の引き出しを開けた。

エピソード２４　　接近

--- ８月４日　月曜日 ----------

優子と入れ違いに佐伯は、朝日見に戻ってきていた。 ノートパソコンで計画書を手直ししていたが、ふと手が止まり、中指で机の上を２度 軽く叩くと、電話の受話器を取り上げた。電話に出た相手は美菜子の下宿のおばさん だった。

「ああ・・佐伯です。美菜子さんはいらっしゃいますか。」
「佐伯さん、もう帰って来られたんですか。」
「ええ。今日着いたばかりです。」
「忙しいですね、社長さんは。あっちやこっちや。」
「あの・・美菜子さんは？」
「ああ。美菜子さんはねえ、主人と釣りにいったんですよ。」
「もう足はいいんですか？」
「ええ。釣りと言ってもすぐそこの防波堤ですからね。もうすぐ帰って来ると思いますよ。」
「そうですか。私から電話があったとお伝え下さい。後でまた電話します。」

「そうですか？ああ、ちょっと佐伯さん。いつ、うちに来られるんですか？楽しみにしているんですよ。」
「ありがとうございます。いつでも、そちらの都合のいい時に。」
「じゃあ、今日いらっしゃいよ。そうそう。今日がいいわ。主人がきっとなんか釣ってきますよ、活きのいいやつを。ね、ね。」
「今日ですか？」
「今日は予定でもあるんですか？」
「いいえ・・・急なもんで。いや、いいですよ。行きます。」
「きゃー。」という、うれしい悲鳴が聞こえた。

美菜子とおじさんが釣りから帰ってきたのは、それから１時間ほど経ってだった。佐伯が来ることを知った美菜子は驚いたが、おばさんの興奮に巻き込まれていた。おじさんは大漁だったので鼻歌を歌いながら、魚をさばいていた。

佐伯が来たのは７時頃だった。お膳には食べきれないほどの刺身と魚の唐揚げがあった。宮崎特産の飫肥天もあった。一杯入ったおじさんは普段は無口だが、上機嫌だった。食事中も笑いは耐えなかった。

「ほんとこの人はねえ、毎日毎日、饅頭ができたらすぐいなくなるんですよ。釣りばっかり。」
「でも、いいじゃないですか。こんなにご馳走が取れるんだったら。」と佐伯は言った。
「魚臭い饅頭屋は流行りませんよ。」とおばさんは鼻をつまみながら言った。
「おい、釣りはな。饅頭作りのためにやってんだ。ばか。」
「へええ？説明してみなさいよ。」
「例えばだな。鰈が釣れるとな、『あっ！これだ。鰈の形のあんぱんを作ろう』ってひらめくんだよ。すごいだろう？」
「何が？」
「これが本当の鰈パン。な？カレーパン。」
「ばっかだねえ。」と同時に爆笑になった。
「佐伯さんは、趣味は？」とおじさんが尋ねた。
「僕は釣りはあまり。音楽を聴くのが好きです。」
「音楽？？どんな？演歌？民謡？」とおばさんが割り込んだ。
「クラシックです。」
「あらー。美菜子さんもクラシックが好きなんですよ。ねえ？美菜子さんの携帯の着信音。なんていうんだっけ、あれ？ジュ・・ジュ。」
「モーツアルトのジュノーム」と美菜子は小さい声で言った。
「モーツアルトお好きなんですか？」と佐伯が聞いた。
「ええ。特にピアノ曲が。」
「僕もモーツアルトファンなんですよ。」
「ひゃー。趣味がおんなじっていいわねー。」とおばさんが大きな声を上げた。

その頃だった。いつもどおり帰りが遅い野村は、美菜子の下宿の前を通り、しばらく走ったところに、佐伯の利用している黒い外車が停まっているのを見つけた。野村は

その側に停めて中をのぞいた。誰もいなかった。どうやら側の居酒屋に入っているみ たいだと思い、中をのぞくとと運転手がカウンターで焼き鳥をかじっていた。

「おい。こんなとこで何をしているんだ？」
「ああ。野村さん。」と運転手が振り向いた。
「社長を待っているんです。そこの和菓子の店に行ってるんで。」と美菜子の店の方を指差した。
「なんか買っているのか？」
「いいえ・・招かれたみたいですよ。早く終って欲しいですよねえ。こっちは酒も飲めなくて。焼き鳥ばっかり。」
野村は黙って出ると、ユーターンして店の方角に戻った。そして美菜子の店を少し通り過ぎた所で車を停めた。

店の中では佐伯が帰ろうと立ち上がっていた。
「もう帰られるんですか？もっとゆっくりしていかれればいいのに。」とおばさんは引きとめた。
「車を待たせてあるので。」
美菜子は表まで見送りに出た。佐伯は携帯で運転手に迎えに来るように言った。
「今日は本当に楽しかったです。とても愉快なおばさんとおじさんですね。」
「とってもいい人たちです。」
「久しぶりに笑えました。疲れが取れたみたいだ。」
「リラックスしたい時は、いつでもお越し下さい。おばさんは佐伯さんのファンみたいですから。」
「美奈子さんも東京に来られたら、是非連絡して下さい。ここではいいクラシックコンサートが来てないでしょう。僕は知り合いからよくチケットが手に入るんですよ。是非一緒に。」
「ありがとうございます。でも・・・東京にはたぶん行かないと思うので・・・」
「東京が嫌いですか？」
「いえ・・・」
美菜子の暗い声に佐伯は気づいた。
「人がある場所に行きたくない理由はふたつある。ひとつはそこに行くと嫌な思いをする。これは自己防衛だから仕方がない。もうひとつは・・・」と言いながら佐伯は空を見上げた。
「もうひとつはそこに嫌な思い出がある。」
美菜子は佐伯の背中を見つめていた。
「嫌な思い出を避けていたら、人間どこにも行けなくなる。人生、どこに行っても嫌な事は起こりますからねえ。」と言うと佐伯は振り向いた。
「嫌な思い出の場所をいい思い出の場所に、変えるっていうのはどうですか？僕も弟の死んだこの宮崎は嫌な思い出の場所です。始めは来たくもなかった。でも、今はここでビジネスを成功させ、町の人の役に立って、いい思い出の場所にしたいって思っています。
「それでスポーツパーク・・・」と美菜子が小さい声で言った。

「東京で何があったか知りませんが、その嫌な場所でいい思い出を作ればいいんです
よ。モーツアルトの曲があなたを救ってくれるかも。僕も手伝いますよ。」と佐伯
が言った途端、美菜子は何故か涙が溢れてきた。
聖子のことを一人で抱え込んできた美菜子にとって、初めて自分の心の扉を叩かれた ような気がした。

「私には・・・私には・・・恐くって帰れない・・・」とはっきりしない泣き声だった。佐伯は震える美菜子を抱きしめて「大丈夫ですよ。大丈夫。きっといつか、いい思い出の場所になる。」と言いながら、美菜子の背中を擦っていた。

その様子をバックミラーで見ていたのは野村だった。佐伯と美菜子の接近は、野村に とって望ましくなかった。自分だけが砂漠にほり出されたような気になっていた。

エピソード２５　　徳さんの感

---８月５日 火曜日--- 今日は朝からＰＴＡの会長が盆踊りの打ち合わせにきたり、

教育委員会から教頭の件
で電話があったりして校長は忙しく過ごしていた。
教頭が校長になるには、小山の推薦が必要だった。小山は校長室の窓から外を眺めながら、教頭がこのまま定年を迎えてしまうのは、気の毒のような気がして、どうしたものかと考えていた。教頭は無類のギャンブル好きで、教育者としての資質に欠けるところがあったのだ。

手で帽子を少し上に持ち上げ、うちわで扇ぎながら歩いてくる男の姿が窓から見えた。暫くすると扉を叩く音がし、徳さんと森田が入ってきた。 徳さんは校長に軽く会釈をして、焦茶色の警察手帳を見せた。小山は手帳を見た瞬間、 すっと血の気が引いていくのを感じ、その場で立っていられるのが不思議なくらいだ った。あの日以来、いつかこんな日がやってくると思っていた。

「西見警察署の徳山です。今日も暑いですな。夏休みなのに、学校に来られているの は
大変ですな。」徳さんは相手のちょっとした変化も見逃すまいとしていた。
「家にいても特に用事がないものですから、水まきに毎日きているんですよ。そのほ
うが家庭もうまくいくんでね。昔からいいますでしょ。亭主元気で、留守がいいと。
で、警察の方が私に何か・・・」
小山は平静を装ってこう返事するのがやっとだった。

「内村武志という人物をご存じないですか。」森田は内村の写真を見せながら、徳さ んより一歩前にでて校長に尋ねた。
「内村・・？どちらの？」
「先月、朝日見町の崖から落ちて発見されたジャーナリストです。」
「あ、ああ。そんなことがありましたな。テレビや新聞の記事でしか知りませんが。」

「学校に訪ねてこなかったですか。」
「いいえ。何故、私に会いに来るんですか。」
「ご存じないのなら、結構です。これで失礼します。」
森田の後ろにいた徳さんが、話に割り込んできて、まだ話を聞きたそうな森田の腕をつかみ、徳さんは部屋を出て行った。

校長は優子から田口のことを聞かされたばかりだったので、校長の不安は大きく膨れていった。

「もっと質問しなくてよかったんですか。」車の中で森田は徳さんに聞いた。
「今日はここまででいいだろう。内村が学校に来なかったかと聞いたのに、自分に会いに来たと思い込んでいただろ。・・・何かあるな。」徳さんは煙草に火をつけた。

エピソード２６　　佐伯のために

--- 同じ８月５日火曜日 ----------

美菜子は夏休み初めての当直で小学校にきた。まだ足は１００％ではなかったが、走らなければ大丈夫になっていた。美菜子が棚の整理をしていると、小山校長が飲み物を取りに入ってきた。

「おう。高田先生。今日が当番ですか？」
「はい。今、来たばかりです。」と振り向いた美菜子は、少し足をかばいながら校長の方に歩いてきた。
「足が？？」
「ええ。ちょっと挫いたので。」
「なら当番を代わってもらえば、よかったのに。」
「大丈夫です。たいしたことじゃないんです。それより・・・。」と美菜子は校長が立っている小さな冷蔵庫の側に寄った。
「佐伯さんに会いました。」
小山の声は急にきつくなった。
「佐伯さんに？」
「足を挫いたとこを通りかかられたんです。佳代ちゃんの支援のこと伺いました。」
「そうですか。本人が言ったんならいいでしょう。」と言うと小山はごくっとジュースを飲んだ。
「校長。佐伯さんは校長の持っておられる土地を、買いたがっておられます。」
「そんなこと知ってますよ。あんたに言われなくても。」といつもと違ってぶっきらぼうな言い方だった。
「町の人のためにスポーツパークを造りたいそうです。」
「スポーツパーク？？？そんなこと聞いてませんよ。」
「みんなが安全に遊べるところを提供したいと。」

「口からでまかせじゃないんですか？どうせ、土地が手に入った途端、あの工場を広げるんでしょうから。」
「佐伯さんはそんな人じゃありません！」美菜子の顔がこわくなった。
「やけに肩を持つんですね。同じ東京の人だから？」
「違います。ただ・・・私には分かるんです。」
「何が分かるのか分かりませんが。とにかく、高田先生には関係のないことです。」と言うと小山は部屋から出て行こうとした。
「校長！」と呼び止めたが、小山は「佳代ちゃんのことで話されるのは勝手ですが、土地のことには口出ししないで下さい。」と言って出て行った。

エピソード２７Ａ　　疑い-１ 夕方、直子が小山の帰りを待ち構えていた。家に帰った途端、直子は朝から刑事が家
に来たことを不審に思い、小山に矢継ぎ早に質問をした。小山は答えにつまりながらも、内村という人物について、問い合わせに来ただけだと答えた。直子はこの間の、優子の時計のことが気になりつつも、小山に聞き出すきっかけがなかった。今夜こそ、聞いてみようと思ったが、今日の小山はひどく疲れているようなので、諦めることにした。

エピソード２７Ｂ　疑い-２

--- ８月６日　水曜日 ----------

美菜子は盆踊りのやぐらが建てられているとおばさんに聞き、学校に見に行くことにした。門の側で石を蹴っている少年がいた。裕太だった。

「裕太くん！」
「先生。」
「久しぶりねえ。もう大丈夫なの？元気そうだけど。」
「うん。ずっと前に退院した。」と言って美菜子を見た裕太の顔には少しニキビのようなものがあった。
「よかったわねえ。今日は遊びに来たの？」
「ううん。そうじゃないんだ。」というと裕太はうつむいたまま石を蹴った。
「どうしたの？喧嘩でもしたの？」
「喧嘩したのは僕じゃないよ。母ちゃんだよ。」
その言葉に美菜子は驚いた。
「お母さんが？！誰と？」
「校長先生。今、中に怒鳴りこみに行ったんだ。」
「ええ？！何故？」
「僕のせいなんだ。僕が落ちたから。」
「何の話？落ちたって、受験じゃないわよねえ。」

「水に落ちたんだ。入っちゃいけないのに。」

裕太はゆっくりと話し出した。自分が空き地でサッカーをしていて、ボールが柵を越えて貯水槽に入り、自分が取りに行って落っこちた話だった。

「で、なんでお母さんが怒っているの？」
「空き地は校長先生のもんなんだって。校長先生がちゃんとしてないから、僕が病気になったって言ってるんだ。」
「病気って・・・裕太君が入院したのは水に落ちたせい！？」
「そうらしいよ。汚い水を飲んだからだって、母ちゃんが言ってた。」
美菜子の頭には、一瞬、佳代のことが浮かんだ。もしかして佳代も、その水に・・・だから校長があんなに心配して佐伯を紹介したのだろうか？？？
「でも、僕が悪いんだ。立入禁止って書いてあるのに、入っていったから。校長先生は僕が嫌いになるよ。」
「それで誰にも言わなかったのね。」
「うん・・でも友だちが遊びに来た時、口をすべらして・・・」
「裕太君は気にしない、気にしない。校長先生は裕太君を怒ったりしないわよ。それより、もう危ないとこに入らないでね。約束？」と指切りに手を差し伸べた。

下宿に帰った美菜子は、店の表に立っている森田に驚いた。
「高田先生。お久しぶりです。」
「どうなさったんですか？」
「いやあ。あれからどうなさってるかなっと思って、カキ氷食べるついでに寄ってみたんですよ。あれから佳代ちゃんのこと何か判りましたか？」

「いえ・・・でも、佐伯さんにはお会いできました。」
「そうですか？！僕らよりラッキーだなあ。」
「え？」
「いえ、僕たちも会いに行ったんですよ。死んだ内村の事で。でも東京に戻ったって言われて。」
「ああ。言ったり来たりみたいですよね。」
「佳代ちゃんのこと、どう言ってました？」
「何も詳しい事は知らないみたいです。でも・・・」
「でも？？？？」
「関係ないかもしれませんが・・・今、裕太君っていう生徒に会ったんです。裕太君も佳代ちゃんと同じ、急にお腹いたになって入院してたんです。」
「えええ？！で、原因は分かったんですか？」
「ええ。貯水槽に落ちたらしいんです。」
「貯水槽？」
「校長がもっておられる空き地があって、そこに貯水槽があるんですが・・・」と美菜子が説明しだした。
「じゃあ、汚い水を飲んだせいだったんですね。佳代ちゃんも同じとか？」
「私もそう思ったんです。でも佳代ちゃんはずっと入院したままだから、きっと他にも悪いところがあったんじゃ？」

「そうですね。きっとそうですよ。でも、もう子供たちが、落ちないようにしてもらいたいもんだなあ。立入禁止っていったって、子供は入りますからね。水を抜くとか、どうかならないもんですかね。」
「私も心配です。校長先生に土地を売るように勧めているのに・・・」
「何の話ですか？」
「いえ・・・土地を買いたいと佐伯さんがおっしゃっているのに、校長は売ろうとしないんです。空き地でほっとくからこんな事に・・・」
「なんで売りたくないんでしょうね？」
「分かりません。でも裕太君が落ちたと分かったら、気が変わるかも。」

森田が警察署に戻ってこの事を徳さんに報告すると、徳さんは「おい。」と言って立ち上がった。黒板の前に行って「この佳代ちゃんがだあ。」と指をさし、「貯水槽に落ちたとするんだ。校長は詫び代わりに佐伯に頼んで、病院を紹介する。」と言って佐伯に指をさした。
「もしかしたら、貯水槽の事を口止めされているかも知れんぞ、岸本たちは。」
「そうかあ。そうだったのかあ。」と森田が頷いた。
「内村がその事で佳代の母親から聞く。」と二人の間を指が行ったり来たりした。
「内村がこれは記事になると思って取材に来る。内村のことだ。校長が土地を売りたくないということも、嗅ぎつけただろう。」
「分かりました！」と森田が叫んだ。
「内村は、校長が土地を売りたくない理由を探ったから、殺されたんですよ。」

エピソード２７Ｃ　　疑い-３ その夜、教頭は西見市のいつもの居酒屋ではなく、朝

日見町にある居酒屋へ佐伯を誘
った。店構えは汚いが、海に近く、獲れたての新鮮な魚を食べさせてくれる店で、佐伯はこの店をとても気に入ったようだった。

今夜、神田が佐伯を居酒屋に誘ったのには訳があった。どうしても校長になりたい神田は、佐伯のコネを利用して、なんとかしてもらいたいと思っていた。話を切り出そうとした時、店に客が入ってきた。

「岸っさん。いらっしゃい。今日のカンパチは最高だね。」と店の亭主が言った。
「今日は大漁だったからなあ。明日も期待してな。」
岸本佳代の父は、この店に魚を卸しているのだった。

岸本は神田に気が付き、挨拶にやってきた。
「教頭先生、佳代が世話になって。」
「佳代ちゃんの具合はどうですか。」
「変わりないみたいだ。少しはよくなっているみたいだが・・・。」
「元気になって、早く帰って来れたらいいですね。岸本さんもなにかと不自由でしょう。」

「ああ、母ちゃんが福岡の病院に付きっきりなもんで、毎晩ここで晩飯だ。早く良くなってもらわんとな。」

二人の会話で佐伯は、この男が岸本佳代の父親だということが分かった。岸本に会いたくないと思っていたので、話を早く切り上げて向うに行ってほしいと思っていた。そんな佐伯の気持ちを知らない神田は、岸本に紹介した。岸本は佐伯という名前を聞いて、佳代が世話になっている人だと気づき、普段使い慣れない丁寧な言葉でお礼に酒をおごる言った。

佐伯に用事のあった神田と岸本に会いたくなかった佐伯は、できるだけ早くこの時が過ぎるのを願っていた。初めは、緊張した面持ちで岸本は酒を飲んでいたが、酔っ払ってくると、だんだんと佐伯に絡みだした。

「佐伯さん。・・・前からおかしいと思っていたんだが、なんで佳代の入院代や母ちゃんのホテル代を払ってくれているんだい。金持ちの気まぐれか？うちが貧乏だと思って憐れんでいるのか？」

佐伯は酔っ払いを相手にしても仕方がないので、黙って酒を飲んでいた。神田は佐伯に自分の頼みを、聞いてもらわないといけないため、佐伯の機嫌が悪くならないように、なんとか話題を変えようと必死だった。そんな神田の努力も虚しく、岸本はますます酔っ払ってきた。

「なんとか言ったら、どうだい。ほんとは、うちの母ちゃんが目当てなんだろ。おい、なんとか言えよ。」
佐伯のこぶしは膝の上で細かく震えていた。神田は佐伯に謝り、あわてて居酒屋から連れ出した。岸本の家はすぐ傍だったが、一人では歩けないほどで、神田に抱えられるようにして家に帰った。神田はすぐに居酒屋に戻ったが、そこには佐伯の姿はなかった。

---８月７日　木曜日--- 翌日、いつもなら静かなはずの海辺が、朝早くから騒がしかった。夜明け前に漁に出 た岸本が、船から落ちて遺体で発見されたのだった。例の朝日見町の巡査が、必死に 野次馬たちを押しながら「戻って下さい。戻って。」と怒鳴っていた。

エピソード２８　　事故？

---　８月７日　木曜日 ----------

岸本の事件の担当になったのは、徳さんではなくもう一組の刑事たちだった。現場ではそのうちの一人が、側の居酒屋から走って戻ってきた。
「先輩。居酒屋の主人が言うには、昨日の晩遅くまであそこで飲んでいたそうです。相当酔っぱらっていて、一緒にいた二人に絡んでいたようですね。」

「誰と飲んでいたんだ？」
「朝日見小学校の教頭・・ええと、神田と・・・もう一人は、居酒屋の主人は見たことのない男だったと言ってます。」
「３人で帰ったのか？」
「いいえ、酔っぱらった岸本を、神田が送って行ったそうですが、またすぐ戻ってきたとか。」
「事故かもしれないな・・・・二日酔いのまま船に乗って、落ちたとも考えられる。とにかく、その神田さんとやらに会ってみよう。」

そう言って現場を立ち去ろうとした二人の目に入ったのは、側にある電柱を抱きかかえるようにして立っている神田だった。 その時、居酒屋の中から水を打ちに出てきた主人が「神田教頭！ここにいたんです か？」と呼びかけた。
「神田？」と刑事たちは顔を見合わせた。 二人はまだ電柱にしがみついている神田に声をかけた。

「失礼ですが、神田教頭ですか？」
「は、はい。」と半分、顔を電柱に隠しながら答えた。
「昨日、岸本さんと飲まれていたそうですね。」
「は、はい。何かあったんですか・・？」
「岸本さんが船から落ちて、亡くなられました。」
「えええええ。」と神田の声が震えた。
「ちょっとお話を伺いたいんですが。」
「な、なんでしょうか？」
「岸本さんは相当酔っぱらっていたみたいですね。」
「は、はい。驚きました。」
「あなたが送っていかれたと聞きましたが？」
「はい・・・そこの家の前まで。でもすぐ帰ってきました。」
「もう一人、連れの人がいたのでは？」
「え、ええ。佐伯さんです。」
「佐伯？同じ小学校の人ですか？」
「いいえ。佐伯さんは大会社の社長さんですよ。あのＳＫケミカルズの。」と丘の方を指差した。
「佐伯さんは一緒に送っていかなかったんですね。」
「はい。私だけで。だからすぐ帰ってきたんですよ。佐伯さんを待たせていたから。」
「そうですか。家の周りに不審な人物とか見ませんでしたか？」
「別に・・あの・・・・なんで船から落ちただけで、死んだんですか？酔っぱらったまま乗ったんですか？」
「詳しいことはまだ分かりませんが、スクリューに巻き込まれたようです。」
神田は身震いをして、きつく電柱に抱きついた。
「またお話を伺いにいくかもしれません。しばらく町を出ないで下さい。えっと・・住所を。」と刑事たちは神田の住所を聞き出した。

エピソード２９Ａ　　小山の疑問

　-- 同じく８月７日　木曜日 ----------

小山は自分の貯水槽で裕太が誤って落ちたため、病気になったことを聞き驚いた。興奮していた裕太の母親には頭を下げて、なんとか帰ってもらったが、これで済むとは思っていなかった。 小山は空き地へ行ってみたが、罎水が溜まっている貯水槽に落ちただけで、入院しな ければいけないほどの病気になるとは、どうしても思えなかった。腑に落ちない小山 は、佐伯の会社に向かった。

「小山さんが、わざわざこちらにお越し下さるとは、どのようなご用件でしょうか。」
「今日、こちらに伺ったのは、下の空き地のことで。」
小山が美菜子からスポーツパークの建設の話を聞いて、土地を売る気になりやって来たと思い、佐伯は心の中で、してやったりと、ほくそ笑んだ。

「空き地の貯水槽に子どもが落ち、病気になり入院したんです。」 なぜ佳代のことが

分かってしまったんだろう。昨日の夜、岸本に会ったからだろうか。
岸本が校長に何か言ったのだろうか。いろんなことが、佐伯の頭の中を駆け巡った。

「それが何か私に関係があるんですか。」
「まだ詳しいことは分かりませんが、佐伯さんの会社は薬品会社で、そのすぐ下が、
　私どもの土地でして・・・。今まで全くそういうことがなかったものですから。」
「当社の薬品が流れ出たとでも言いたいのですか。」佐伯の声はいっそう大きくなった。
「いえ、そういう訳じゃなく、何かご存じないかと思いましてね。」
「薬品の管理は、十分すぎるぐらい注意しています。」
「そうですか。ちょっとお聞きしたかっただけですから・・・こちらに来る前に、水
　を採取したので、調べれば何か分かると思います。」

その時、内線鳴り佐伯は電話を取った。「ああ、ちょっと待ってもらって下さい。」
「お客さんのようですね。それでは、失礼します。」と言って小山は部屋を出て行き、受付で目つきの鋭い二人の男とすれ違った。

エピソード２９Ｂ　　ファイルの中身 その頃、岸本の死を知った美菜子は、佳代の

ことが気になって仕方がなかった。病気
の上に、父親を亡くすとはあまりにも不幸すぎる。そう思った美菜子は、佐伯に会いに行くことにした。校長の土地の件も話したかったからだ。

美菜子はロビーに偶然出てきた佐伯と出会うが、佐伯は刑事たちと会うために、別の場所に呼び出されていた。美菜子は佐伯の部屋で待つことになった。 佐伯の部屋に入った美菜子は、どこに座っていいのか分からず、キョロキョロしなが ら、壁の絵を見たりテーブルの上の雑誌を、手に取ったりして落ち着かなかった。椅 子に腰掛けるときに、テーブルの端にあった雑誌を床に落としてしまった美菜子は、 偶然テーブルの下の段にあったスポーツパークの計画書を目にした。

「スポーツパークの計画書だわ。」とうれしそうにそのファイルを取り出した。計画書をファイルの中から出した途端、その下になっていた紙が床に落ちた。その紙はあの水の検査結果だった。床から拾い上げた美菜子の目に入った文字は『貯水槽水質検査』だった。その内容を見た美菜子は、佐伯を待たず部屋を飛び出した。その様子をドアの影から見ていたのは野村だった。

美菜子が出て行った後、同じ紙を見た野村は、美菜子に水質検査の結果を見られたことを知った。野村は同じファイルの中にあったもう一枚の紙を見つけた。それはあの聖子事件のファックスだった。

その頃なにも知らない佐伯は、警察に取り調べられていた。警察の鑑識の結果、岸本の死は事件だと判明した。船の後部に油のようなものが塗ってあり、岸本は足を滑らせて、スクリューに巻き込まれて死亡したのだった。佐伯の話は神田の言ったことと全く同じだった。しかし神田にも佐伯にも朝方のアリバイはなかった。ただ岸本と佐伯は、初対面だったことは分かった。
「初めて会ったとすれば、どれが岸本の船が分からないでしょうね。それに土地の人じゃないし。」と刑事は言った。

検査の結果にはTetrachlorodibenzo-p-dioxin(四塩化ジベンゾダイオキシン)と書かれてあった。学校に寄った美菜子はそれを化学の本で調べ、一般に言われるダイオキシンだと確認した。そして除草剤に含まれていることも知った。もうひとつの薬品Lindane(リンデン)は、劇薬として取り扱われている農薬だと分かった。 その夜、美菜子は全く眠れなかった。水はただ古かっただけではなく、佐伯の会社で 扱っている薬品が入っていたのは、何故？何故？
美菜子の頭から消えなかった。

エピソード２９Ｃ 神田の自供 佐伯は刑事が来ている間に、美菜子が帰ってしまった

ことを知り、しばらくソファで
目を閉じて座っていた。朝から、小山が貯水槽の件で訪ねて来て、入れ替わりに岸本のことで刑事がやって来た。佐伯はとても疲れていた。そして無性に美菜子に会いたかった。

夕方、警察から再び事情を聞かれ、取調べを受けた神田は、家に帰ってからも食事が喉を通らず、憔悴しきっていた。

神田は一人でボートに乗っていた。突風にあおられ海に投げ出され、必死で泳いでボートに上がろうとすると、下から足をつかまれた。もがきながら足元を見ると、岸本が神田の足をつかんでいた。助けを求め、声を出そうとするが声がでず、神田は深い海の底に引きずりこまれていった。

「どうしたの。ひどくうなされていたけど・・」妻が神田を揺すって起こした。 神田は昨日から同じ夢を何度も見ていた。妻の問いに返事もせず、家中の照明をすべ て点け、台所で水を一気に飲み干し戻ってきた。普段から小心者の神田であったが、 尋常でない神田の様子に、妻はおかしいと思っていた。

「昨日から様子が変だけど、何かあったんですか。誰もいない部屋まで電気を点けたりして。」
「岸本さんを・・・」神田は蚊の鳴くような小さい声でポツリと言った。
「えっ？岸本さんがなんて？」
「岸本さんが死んだのは、わしのせいだ・・・。」
「どういうこと？」
「ちょっと脅かそうと思い、船に細工したんだ。足を滑らせて海に落ちても、泳ぎの達者な岸本さんが溺れるはずがないと思ったから・・・。まさかスクリューに巻き込まれてしまうとは・・・わしが岸本さんを殺してしまったんだ。」

岸本が亡くなったことは、小さな町なので知っていたが、神田がこのことに関わっているとは思ってもみなかった。

「なんで、そんなこと・・」
「佐伯君の人脈で、校長になれるように根回しをしてもらおうと頼んでいた時、岸本さんが来て一緒に飲むことになった。岸本さんが酔っぱらい、佐伯君に絡んでいるのをみて、ちょっと懲らしめてやろうと思った。そうすれば、話がうまく進むと思ったんだ。」
「なんてことを・・」神田の浅はかな考えに妻は言葉がでてこなかった。それほど校長になること執着していたとは、思っても見なかったのだった。
「とりかえしのつかないことをしてしまった。」神田はうなだれながら呟いた。

神田はこれ以上隠し通せるものではない、いずれ分かってしまうと思い、翌朝、妻に付き添われて自首した。

エピソード２９Ｄ　　約束

-- 同じく８月８日金曜日の朝 ----------

美菜子もあくる朝、佐伯に電話をした。
「美菜子さん。昨日は急に帰ってしまわれたそうでびっくりしました。家に電話したんですが、帰っておられなかったので。」
「ちょっと学校に寄ったので。あの・・今日お会いできますか？」
「もちろん。実は今日からの祭りにお誘いしようと思ったんです。うちの会社も盆踊りにいろいろ寄付しているんですよ。ちょっと寄ってみたいと思っていたんですが。行かれませんか？」
「ええ・・」美菜子は迷った。難しい話を祭りでするのは向いていないと思ったが、聞きにくい話を持ち出すのには、かえっていいかもしれないとも思った。
「盆踊りには行きます。」
「じゃあ、７時頃には行けると思うんですが、学校の盆踊りのところで会いましょう。」
「分かりました。先に行ってます。」

その時、野村は佐伯の部屋にいた。出荷する農薬のリストを見てもらうためだった。美菜子と話している嬉しそうな佐伯に、昨日見たことは言わなかった。今の野村は佐 伯を信じてはいなかった。劇薬を保管しなかったのは自分だ。佐伯は何も知らなかっ たと言えばすむ。会社を守るためには、美菜子に気に入られるためには、すべて自分 のせいにしてごまかすかもしれない。そう思っていたのだった。

エピソード３０　　小山の自供

　-- 同じく８月８日金曜日 ----------

小山が書斎にいる時、直子が入ってきた。
「あなた、ちょっとお話があるんだけど。」
直子の真剣な眼差しに、小山は盆踊りの挨拶を書いていたが、その手を止め、眼鏡とペンを机の上に置いた。小山は部屋の中央にあるソファに座り、直子は小山の向かいに座った。

「優子さんの時計の話、覚えてる？田口さんとお揃いだという時計。あなたが優子さんを空港に送っている間に、机の引出しの中を見てしまったの。」
「・・・・」返事に困っている小山に直子は更に尋ねた。
「あの時計は田口さんのじゃないの？」
「たまたま同じデザインの時計だ。昔よく流行っていたからね。だれでも持っているよ。」
「時計の裏側にTo H.T　From Y.Oと彫ってあったわ。H.Tって田口さんで、Y.Oは優子さんよね。どうして優子さんが贈った時計をあなたの机の中にあるの。」
「・・・結婚前に田口が家へ訪ねてきたんだ。その時に忘れて帰ったから、自宅へ送ろうかと言ったら、また取りに行くから預かっておいてくれと頼まれたんだ。」
「じゃ、どうしてその話を優子さんにしなかったの？」

なんとか話をごまかそうと嘘をついていた小山だが、ついに諦めてすべてを直子に話した。

「田口さんの話を信じたの？それであなたは、田口さんを殺したの？」
「そうじゃないんだ。殺すつもりはなかった。でも君の話を聞いて、カッとなったのは事実だ。殴ってやろうと思ったが、殺そうなんて思わなかった。」小山の声は消え入るように小さく、直子は今までこんな小山を見たことがなかった。

「あの時、すぐに警察に連絡すればよかったんだが、君を失ってしまうんじゃないかと思って、それが怖かったんだ。」
直子は涙が止まらなかった。小山が人を殺していたという事実と、自分を信じてもらえてなかったということが、ただただ、悲しかった。

エピソード３１　　祭りの夜

-- 同じく８月８日夕方 ----------

町は今夜から始まる盆踊りのお祭りで賑わっていた。小学校の手前から出店が並んでいた。校庭ではもう盆踊りの音楽の稽古が始まっていた。浴衣を着た人たちが、ぞろぞろと学校に向かって歩いて行っていた。しかし校庭には、小山の姿も神田の姿もなかった。２～３人の教員たちが何かヒソヒソ話をしていた。

美菜子も学校に向かっていた。だが、彼女の顔には他の人のような笑顔はなく、周りの景色も目に入っていなかった。ちょうど下宿から二筋目のところで、急に横から腕を引っ張られた。路地に引っ張り込まれた美菜子は、口を押さえられていた。抵抗したが、まだ足が 100%でない美菜子は、逃げることはできなかった。そのまま引きずられるように、路地の奥へと入っていった。その時、美菜子の携帯が落ちたことに彼女も犯人も気づかなかった。

その頃、森田と徳さんは、ＳＫの裏の崖を降りたとこにある工事現場にいた。あの赤いレンタカーが、深い池の中で見つかったのだった。工事のために水を抜こうとした時、屋根が見えたのだった。そこに行く道は細く通行止めが置いてあったので、工事関係者以外は入ることことはなかった。

警察に電話があり、小山の家に向かおうとしていた森田と徳さんは、駆けつけることになったのだった。リフトで持ち上げられた車を二人は見つめていた。車の中にはプラスチック容器に入った汚い水があった。
「なんでしょうね？これは？」森田が揺らしながら言った。 徳さんはフロントシートに張り付いたようになったＳＫケミカルズの会社案内パン フレットを見つけた。

「ＳＫと汚い水か・・・」と徳さんは言った。
「おい。もしかして間違っていたかもしれないな。土地の事で隠したいことがあったのは、校長じゃなかったかも。」
「どう言うことですか？」森田が聞いた。
「とにかく両方に話を聞くまでは分からん。おい・・・これをすぐ分析してくれ！」と徳さんはプラスチック容器を警官に渡した。

この事を伝えるために森田は、美菜子に電話したが誰も携帯に出なかった。森田は下宿に向かった。そこで美菜子は祭りで、佐伯と会う約束をしていると聞いた。森田は慌てた。もしＳＫが内村殺しに関わっていたら・・・そう思いながら、走って学校に向かった。そこには佐伯はいたが美菜子はいなかった。

「美菜子さんは？」
「ずっと待っているんだが・・・先に言っていると言ってたのに。」
森田は佐伯に直接レンタカーのことを問いただすことにした。
「どうしてＳＫケミカルズのパンフレットが内村の車の中にあったんですか？」
佐伯は急に青ざめて走り出した。美菜子が危ないと思ったからだ。森田は後を追った。
「ちょっと待ってください。逃げるんですか？」
佐伯は美菜子の下宿の方へ戻って行った。美菜子の携帯に電話しながら。森田は必死で追った。祭りの客にぶつかりながら。盆踊りの音楽が鳴り響いていた。

その頃、美菜子は野村にロープでくくられていた。
「あなたは誰？どうしてこんな事を？」
「あなたがいろいろ知りたがるから、いけないんだよ。」
「一体なんのこと？」美菜子はロープを外そうと身体を捩じらした。
「誰か助けて！！」と美菜子は叫んだ。
「じっとしていろ！！あんたと仲良しの佐伯様は来ないよ。」
「いいか？あの水の事を知っているのは、俺とあんたと佐伯だけだ。内村は消えたからな。あんたさえいなくなれば・・」
「水？水って、貯水槽の？あなたはＳＫの人？」
「ああ、そうだよ。俺の失敗で薬品が流れ出したんだ。だがな・・・すぐに対処しなかったのは、あの佐伯様だ。」
「まさか・・佐伯さんは、あの土地をスポーツパークに・・・」
「土地を手に入れるための口実だよ。」
「そんなはずはないわ。佐伯さんは弟さんが死んだから・・」
「ばっかだなあ。佐伯に弟なんかいないよ。」と言いながら野村は水に粉を混ぜていた。
「じゃあ、何故、毎夏ここへ？」
「先代の命日だよ。佐伯亮介さまああ。」と言いながら、美菜子のそばにコップを持って寄って来た。
「これ飲んでもらおう。あんたには自殺してもらわないとな。」
「自殺？？」
「そうだよ。聖子ちゃんの先生。悩んでらっしゃるでしょう？？」と言いながらコップを口のそばに持ってきた。

その頃、佐伯があの路地角に来た時、モーツアルトの曲が聞こえた。美菜子の携帯だと佐伯にはすぐに分かった。路地には携帯が落ちていて、人を引きずったような後があった。それをたどって行くと、捕らわれている場所だった。佐伯は扉を押し倒して中に飛び込んだ。美菜子の傍にいた野村は「王子様の登場ですかこの人は水質検査を見てしまったんですよー。これを飲んで死んでもらいましょう。」と言って無理やり美菜子に飲ませようとした途端、佐伯が飛びかかった。

二人が格闘するするうちに、野村は古い錆びた魚をさばくためのナイフを見つけると、それで佐伯の腹に刺した。その時、あの森田が中に入ってきて、後ろから野村を取りおさえた。

____

警察で野村は、内村殺しの自供もした。あの日、内村は朝日見に着き次第、貯水槽のあるとこに行き、そこで水をプラスチック容器に入れた。そこへ上の土地から見ていた野村は、内村に声をかけ、大阪弁の内村に自分も大阪に住んでいたことがあると言って、酒に誘ったのだった。内村をＳＫに連れて行き、そこで当直室で飲んでいたせいで、あのレンタカーを見た人は、いなかったのだった。話しているうちに内村が、ジャーナリストだと分かり、この男に水を持っていかれてはいけないと思った。相当酔った内村を旅館に送って行くと言って、海の方へきた野村は、あの岬のところで気分の悪くなった内村を降ろして、その時に襲ったのだった。そのままレンタカーをＳＫの裏の工事現場に持って行って池に沈め、ＳＫに戻って自分の車で家に帰った。パンフレットは内村がまだ酔っていない間に、持ち帰ろうとしていたものだった。

____

エピソード３２　　最終回

　--- ８月９日土曜日 ------ 翌日、小山は警察に行った。３０年も経っているので

時効ではあったが、教育者とし
ては失格だと思い、教育委員会に辞表を提出した。
数日後、小山は田口の時計を持って優子のいる東京へ向かった。優子が許してくれるかどうかは分からないが、小山はこれから一生、償っていくつもりだった。

　____________

徳さんと森田は一度に二つの事件が解決し、ホッとしながらあの黒板を消していた。
「結局、この黒板に書いてなかった人が犯人でしたねえ。」と森田が言うと徳さんはジロッと睨んだ。

　____________

岸本多恵は夫の葬式で、美菜子に佳代の病気と貯水槽の関係を知らせれていた。
「警察病院のお医者さんに聞いたんですが、佳代ちゃんは絶対よくなるそうです。今まで、されていた治療もちゃんとしたものだったそうです。担当のお医者さんは、代わるそうですが・・・心配しないで下さい。よくなったら、佳代ちゃんに会おうと思ってます。」
「先生。先生・・・ありがとう・・・ありがとう。」と多恵は美菜子の手を取って感謝した。葬式に来ていた裕太の母親も貯水槽の事を聞き、「先生がこの町に来た時は、なんか嫌な予感がしたけど、今は来てもらってよかったと思ってるんですよ。裕太の顔もこれでよくなるし。」

――――――――――――

それから数日後、美菜子は入院している佐伯に会いに行った。ＳＫケミカルズは朝日見の工場を閉めなければいけないことになったが、佐伯の命に別状はなかった。
「どうしてあんなに嘘ばかりついたんですか？もっと早く貯水槽をきれいにしていれば。」
「いれば、野村君は職を失ったでしょう。彼には１０歳になる、体の弱い娘さんがいます。その子のために週末も働いていました。」
「でも、弟さんの事故まで作り上げるなんて。」
「作り上げていません。僕が何故運転しないか不思議に思ったことはないですか？」
そういえば、いつも運転手つきだと美菜子は思った。
「僕には腹違いの弟がいました。傲慢な父は母にも隠さず、僕を連れてよく弟のとこに来ていたんです。野球のことも車に轢かれたことも事実です。僕はそれから怖くて運転できないんですよ。」

佐伯はすべて嘘をついていたのではなかった。そして、あの土地をきれいにして、スポーツパークにすることを約束した。佳代の支援も一生続けると約束した。そして、裕太の治療費も出すと。

「裁判が終わったら・・・東京でコンサートに行きましょう。」と佐伯は言った。

――――――――――――――――――

美菜子は東京にある聖子の墓を参っていた。空を見上げると青く澄みきっていた。 おわり